

第二章 曳山狂言

第一節 現状の曳山狂言

第三章では平成二三年の曳山狂言について見ていく。曳山狂言は長浜曳山祭に曳行される曳山の舞台でおこなわれる芸能である。主に歌舞伎が演じられるが、狂言などがおこなわれることもある。

以下、二三年出番山の状況を中心に狂言執行にかかる①役職②外題の決め方③役者の決め方④三役の決め方⑤衣装屋・鬘屋・顔師・小道具屋の決め方⑥稽古までの行事⑦稽古⑧役者親⑨演出⑩三役修業塾について報告する。

第一項 役職

本項では曳山狂言にかかわる役職に焦点を当てる。主な役職は筆頭・副筆頭・会計・相談役（取締）・三役係・舞台後見・籤取人・役者係（役者方）・賄方である。役職の種類は山組によつて異なり、月宮殿のように人数が多ければ役職は細分化する。また、山組の人数の増減などに応じて役職の数が変わる。

平成二三年の出番山組は、主に若い衆が、狂言にかかわる役職に当たっている。年齢と役職の関係は、基本的に年齢の若い方から役者係・舞台後見・副筆頭・筆頭・相談役・三役係となっているが、途中から若い衆に加入した人や、仕事の都合で役を全うできない場合はこの限りではない。

役職ごとの人数は、人数の多い山組では複数人就ぐが、人数の少ない山組は一人である。役者係の人数は役者一人に対して、春日山・青海山が一人、月宮殿が二人、諫鼓山が二、三人である。青海山は若い衆が多かったときは、役者一人につき二、三人の役者係をつけていた。一方、諫鼓山は今回若い衆が増えたことと、平成二三年の外題に着替えが多いため役者係を増員している。以下、平成二三年の出番山を中心に見ていく。

【春日山（本町組）】

若い衆と中老の役割 狂言はすべて若い衆が采配する。三役や外題も若い衆が決める。曳山の運営は中老が担当する。曳山は若い衆が曳くこともあるが、中老が采配する。

筆頭の役割 筆頭は狂言を始め祭りでの責任を負うが、自分では動かず、下の者に任せなければならない。以前の筆頭のなかには狂言の稽古のときに稽古場に行くとものをいいたくなるので、ずっと外

役職	人数
筆頭	1人
副筆頭（総務担当・綱先）	1人
副筆頭（演芸担当）	1人
三役担当兼副筆頭補佐	1人
相談役	1人
籤取人	1人
舞台後見	2人
会計	1人
裸参り・賄い担当	2人
演芸担当	1人
舞台担当	1人
道具担当	2人
役者担当（チーフ）	1人
役者係	5人
パンフレット委員長	1人
パンフレット委員	3人
囃子担当	1人

役割分担表（春日山）

役職	人数
中老相談役	4人
若い衆相談役	2人
負担人	2人
總當番委員	1人
祭典委員	4人
運営委員	4人
若い衆筆頭	1人
若い衆行事進行・副筆頭	1人
若い衆三役補佐・副筆頭	1人
中老会計	1人
若い衆会計	1人
中老記録	1人
若い衆記録	1人
籤取人	1人
籤取付添人	1人
三役係	中老3人、若い衆2人
衣装カツラ係	中老3人、若い衆3人
御幣宿（中田町）	1軒
御幣持及係	1人
榊持及係	2人（各榊持1人）
役者方総責任者	1人
役者方副責任者	2人
役者方	14人（各役者2人）
舞台後見	2人
稽古宿責任者	中老3人、若い衆4人
中老賄方	5人
若い衆賄方	5人
若い衆賄方相談方	1人
警備担当者	4人
若い衆警備係	4人
綱先取締	中老3人、若い衆2人
電気方	2人
道具方	2人
火防係ローソク方	2人
提灯・扇子方	中老4人、若い衆6人
ボンボリ方	4人
囃子方若い衆	若い衆51人、中老2人
囃子丸管理者	1人
広報係	2人
パンフレット委員	3人
天幕シート方	10人

役割分担表（月宮殿）

で掃除をしている人もいた。筆頭は前回の出番山終了後から三年間で様々なことを掌握して次の出番に臨む。筆頭をすると一皮むけるといわれる。

役者係 役者係は役者一人に一人がつく。

舞台後見 狂言中に役者の動きを補助したり、ツケや拍子木などの鳴り物を担当する舞台後見は後見ともよばれ、一人のこともあるが通常は二人選ばれる。籤取人になることが多く、前回と今回の籤取人が担当して、引き継ぎをしながらやっていく。

道具 大道具や小道具も若い衆が揃える。以前の振付は道具を使うのが好きだったのでたくさん作った。花道の外にせり台を作ったこともあった。

役者の世話 筆頭が決め酒を持っていったときから「山組の子」、「若

い衆の子」と思い、親以上に世話をする。きちんと世話をしないと親に申し訳ない気持ちがある。

【月宮殿（田町組）】

月宮殿は人数が多いため役職が細分化していることと、兼務が多いことが特徴である。祭りの形態は若い衆が狂言を取り仕切る若い衆祭りだが、三役係や衣装カツラ係、道具方で中老の関与がある。なお、表は中老と若い衆を合わせたもので、人数は兼務の場合も一人として換算している。

若い衆と中老の担当 狂言のうち三役の給金や衣装代の支払いなど主な金銭面は中老が担当し、執行は若い衆が担当する。曳山や舞台装置・大道具・小道具の準備などは中老が担当する。中老の人数が

高齢化により減ってきて運営が困難な状況となっている。

役者方 役者一人につき、二人が役者方として就く。基本的に役者方経験者と未経験者が組む。役者方は、自分も役者やシャギリの経験がある人がほとんどなので、子どもと接するときは自分がしてもらったように動く。ただ、初めて役者方をするとき、子どもの見えないところで大人がしていたことはわからないため経験者から指導を受ける。

役者方と役者との関係 最初は若い衆も子どもとのつながりは深くないが、役者方に就くことで子どもからの信頼が深まってくる。子どもが親の手を離れ、若い衆が健康管理も含めた世話をし、食事と一緒にとる。また、かつては役者の親などが、自分の子どもについてもらう役者方を個別に料理屋などで接待していたが、現在は合同で田町会館で役者方を含めた若い衆全員を接待している。

【青海山（北町組）】

若い衆の人数が少ないため、役者係の人数がほかの山組に比べ少な

役職	人数
負担人	1人
副負担人	3人
若い衆筆頭	1人
若い衆筆頭心得	1人
副筆頭 網先	1人
副筆頭 囃子部長	2人
副筆頭 役者係総括	1人
役者親総括	1人
役者係	6人
舞台後見	1人
舞台後見・籤取人	1人
網先・後方	2人
三役係	4人
總當番詰	1人
御幣宿	5人
会計	1人
記録	1人
人事	1人
提灯	1人
警備	1人
山脇	1業者、1人
衣装・小道具	3人
電気設備	2人
賄い	2人
火元責任者	1人

役割分担表（青海山）

い。なお、表は中老と若い衆を合わせたもので、人数は兼務の場合も一人として換算している。

籤取人と舞台後見 籤取人は、次の出番では舞台後見を務める。

役者係 狂言の役者には若い衆が世話役としてつくことになるが、近年は一人の子ども役者に一人の若い衆がつくことが一般的である。昔は若い衆が二、三人ついていた。

かつての入りたての若い衆の役職 入りたての若い衆は、祭りで「ロウソク係」など軽い役を当てられた。

【諫鼓山（御堂前組）】

役者係が多いことが特徴の一つである。要因として平成二三年の外題は役者の着替えが多かったことと、若い衆の人数に余裕があったことが挙げられる。また、副筆頭の人数が例年一人のところを三人にするなど、各役職の人数は筆頭の采配によってかわる。

なお、若い衆全員で交替して稽古場の詰番をする。また、小道具な

役職	人数
筆頭	1人
副筆頭・役者係	2人
副筆頭・会計	1人
取締・三役係	1人
三役係	1人
舞台後見	3人
囃子方	1人
籤取人・役者係	1人
役者係	12人
賄方	2人

役割分担表（諫鼓山）

役者係 今年は若い衆の人数が二五人と近年としては比較的多いうえに、狂言の中での着替えも多いので、役者係を前回の倍にした。

三役係 三役の世話を担当する三役係は、三役に失礼があつてはならないため、若い衆のなかでも年配の人がする。筆頭経験者などが三役係をする。

籤取人の選び方 今回の籤取人は若い衆の一人だが、町外の人が務めた。なるべく自町で探すことが望ましいとされている。筆頭が籤取人を依頼する。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

出番山のときの若い衆 出番のときは常に稽古場に詰めている。稽古が終わる頃にはみんなが寄つてきて打合せをする。筆頭は稽古が始まったら昼間から会所に詰めている。振付に頼みっぱなしではない。詰番に出られないときには商売している人に頼む。役者一人に若い衆一人がついて、面倒をみる。

【翁山（伊部町組）】

役者の世話 若い衆は食事や送迎など役者の日常の世話から、衣装など舞台の世話をする。また、稽古場に詰める。

【常磐山（呉服町組）】

役職 暇番山の際には、筆頭・副筆頭・囃子方のみ役職が置かれるが、出番山の際にはその三つ以外に役者方・三役・照明・衣装・音響・道具・賄いという役職が置かれる。役者方以下は祭りの半年前に決める。

役者方 役者の子ども一人に対し、役者方が二人。化粧だけでも一人に一時間かかり、様々な身の回りの世話をする。裸参りや籤取り式、様々な行事についてそれぞれ決まった服装や足袋の色があり、次々と着替えなくてはならず、毎日その段取りを決めていくのが大変である。

【萬歳樓（瀬田町組）】

役職 筆頭一人のもとに副筆頭が七人いる。この七人が責任者となつて役者方・衣装方・鬘方・道具方・賄方などの役をまとめる。さらに各副筆頭のもとに班長を設けている。このようにして若い衆に仕事を引き継ぐ体制を整えている。

第二項 外題の決め方

外題とは、歌舞伎や浄瑠璃の題名のことをいうが、長浜では、演目そのものことも外題という。長浜の曳山狂言では主として歌舞伎が演じられている。ここでは、外題の選び方を中心に見ていく。

基本的に出番の前年の一月から一月にかけて、山組と振付の協議によって外題を決める。山組が具体的な外題を希望することもあれば、「女形が多く華やかなもの」や「御殿もの」のようなイメージを伝え、それを受けて振付が提案することもある。振付の先生が実際に振付けできる外題との兼ね合いもある。若い衆が中心となつて外題を決めるところが多い。若い衆はよその狂言を見て外題選びの参考にする。

外題の選び方は山組によって異なる。月宮殿・鳳凰山・翁山・常磐山などでは以前上演した外題を選ばないようにする。一方、多くの山

組では、以前上演して好評だったものや、筆頭が子どもの頃に上演したものを選ぶことがある。また、壽山は世話物を選ぶことが多いなど山組によって特徴がある。

年によっても選ばれる外題に特徴がある。放送中の大河ドラマに合わせたり、不景気のときは太閤記物を選んだりすることがある。他方、観光客を意識するのは長浜の観光化が盛んになった近年の傾向といえる。

外題は、二月一日の山組総集会での発表まで山組外に公表しないことになっており、外題がほかの山組と同じになった場合には、平成二三年の場合は總當番に先に届けた方が優先されることになっていた。しかし、実際は事前に山組間で情報収集をしているので重なることはほばない。

なお、長浜の曳山狂言は、長浜用として別に仕組んだもののため、歌舞伎などでつけられる外題とは別の外題をつけることになっている。この外題は長浜外題ともいべきもので、曳山の舞台にかけられる外題板（サンガケともいう）といわれる看板に書かれる。

【春日山（本町組）】

外題の決定 基本的には筆頭と振付が決める。外題を決めるのは筆頭の妙味である。よその山組よりよいものをし、自分らしさを出したいと考える。前の出番山が終わって筆頭がかわるとすぐに考え始める。しかし決めるのは難しい。春日山では「義経千本桜」がお家芸になっている。着物も綺麗で子どもも可愛くみえる。昭和五〇年代には「絵本太功記」の十段目を続けて上演していた。衣装なども作っ

ていた。ただ舞台では「派手にしたい」ので衣装は新調にすることが多い。

平成二三年の外題 最初は山組から「紅葉狩」・「春日龍神」が希望された。そのなかには「変わり」があり、大掛かりで衣装も大変なため、費用などの問題があった。結局振付の先生が振付けできる外題から、「釣女」に決定した。

【月宮殿（田町組）】

平成二三年の外題の決め方 役者を依頼する子どもたちの顔ぶれを考えて、振付と相談し、一二月に外題を決める。

平成二〇年の外題決定時期 出番前年の一〇月に若い衆の三役（筆頭・副筆頭・相談役）と振付が協議したのち、一月に振付の家で負担人・副負担人が協議して、「碁太平記白石斬 新吉原揚屋」という外題が決定している。

【青海山（北町組）】

平成二三年の外題 一二年中に、外題を若い衆と振付が相談して、大河ドラマ（平成二三年は「お江」）のイメージから、お姫様が登場する演目をおこなうことにした。

【諫鼓山（御堂前組）】

外題の決め方 外題の決め方は振付によって異なり、現在は、振付と筆頭で決める。筆頭に希望の外題があればそれを振付にいう。筆頭が子どもの頃にしたい外題を依頼することもある。また、女形がたくさんで華やかなものといった要望や人数を山組から振付に伝え、

それに対していくつかの外題を提示されることもある。毎回外題が違いため、コストはかかるが筆頭の思いが反映される。中村芝蝶氏が振付のときは、芝蝶氏が候補を出して筆頭が予算や子どもの数を考慮して決めていた。

振付が外題選で重視する点 振付の水口一夫氏によるとできるだけ子どもらしく、子どもが可愛く見えるような狂言を選んでいくという。また、四〇分から四五分でまとまる話か否かを重視する。

【高砂山（宮町組）】

外題の決定 外題は若い衆の役員会で決める。役員会は各町から二人ずつ、当番町だけ三人が出席し計九人でおこなう。中老と予算の折衝をする。三役へのお礼だけでなく、裸参り・賄いなど、すべての費用が必要になる。

外題は出番の前年には候補を決めている。そのために岐阜県の垂井曳山（車へんに山）祭りの狂言などを調べにいくこともある。そして、振付に相談して役者に合わせて決める。外題は若い衆が決めるため、中老が文句をいってもかえるまでにはならない。たとえば、昭和四五年の「弥次喜多道中」は、喜劇のようで評判が良かった。中老のなかには「こんなもん」とあまり評価しない人もいた。

【壽山（大手町組）】

外題の傾向 外題は筆頭が子どもの人数を勘案して決める。壽山は昔から子別れのような泣く芝居を好む。「熊谷陣屋」・「太功記」・「寺子屋」のような時代物はあまりやらない。時代物はカタがあるため、それを作ればなんとか見られるものになる。世話物は芝居をたくさ

んさせるので、壽山は「芸は一番」と自認する。初めて「芸は一番」といったのは昭和六〇年の「蜘蛛の糸」のときで、お金のかかる芝居だった。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

外題の決め方 外題は一月には振付と若い衆の筆頭が相談する。意見を出し、振付の先生が振付けできる外題のなかから選ぶ。若い衆にも外題の知識を持つ人がいるため、希望の外題がいくつか挙がる。鳳凰山では、今まで上演した外題と同じものをあまりしないようにする。中老が外題に口を出すことはない。ほかの山組と同じ外題になったことはない。事前にほかの山組の様子を聞くなどして、内々に調整している。

【翁山（伊部町組）】

外題の決め方 外題は振付と相談して決める。希望の外題を振付ができないこともある。ほかの山組と外題が重なったときは、先に總當番に届け出たほうが優先される。しかし、それまでに内々で相談するため重なることはあまりない。

かつては、過去に上演して好評だった外題を先輩から勧められることもあった。昭和五八年に筆頭をした人は、昭和三七年の筆頭から、自分がして好評だった「葛の葉の子別れ」をするようにいわれたが、比べられたくないで結局しなかった。現在は、以前上演した外題を選ばないようにしている。

【常磐山（呉服町組）】

外題の決め方 外題については、祭りの半年前に山組内で立ち上げる狂言準備委員会で振付と相談して決める。狂言準備委員会の委員長は筆頭とし、委員は常磐山を構成する各町からまんべんなく選ばれた若い衆が務める。ただし役者候補者の親である若い衆は委員に選ばれることはない。過去に上演した外題はしない方針である。

「あの子のこういう役を見てみたい」といった意見で外題が決まることもある。また、景気が悪いときには太閤記物をすることを主張する人もいる。

一人一人の役者に華のあるものがよい。地元の人が楽しめて、観光客もそれを見て楽しめるといふものが好まれる。また、「歌舞伎」ではなく、「狂言」であり、長浜の舞台に合うものを選んでいく。

【萬歳樓（瀬田町組）】

外題の決め方 筆頭が望む外題を振付に依頼する。

第三項 役者の決め方

町内在住か町内出身者と血縁のある男子が選ばれるが、現在深刻な少子化で子どもが足りない山組が多く、ほかの山組の子や若い衆の知人の子どもなどを借り役者して補っている。借り役者の範囲は、旧長浜市域が中心である。

役者の人数は五〜七人で、年齢は小学一年生から中学一年生が中心である。ただし、舞台に合った体格があり、舞台障子の鴨居よりも背が高いほどの大柄な子を選ばれない。舞台方は、役者が急病などにより演じることができなくなったときに、代役をしなければならぬいた

め、役者経験者や年長の子を選ぶ山組が多い。

時代によって役者の決め方は異なる。昭和二〇〜四〇年代は町内に男子がいても、子ども狂言をしている滋賀県米原市の米原曳山祭やほかの山組の芝居の上手な子を借り役者していた。昭和四〇年代後半頃になると町内の子で役者を賄うようになったが、子どもが多い時期だったため、役者が一〇人くらいになることがあった。また、かつて月宮殿では御幣使になった子は役者になれなかったり、青海山では町内の要職の家の子が優先的に役者になれるなどの決まりがあった。子どもは性格をみて役者を選ぶこともある。高砂山ではシャギリの練習中に適正を判断している。

【春日山（本町組）】

役者の決め方 借り役者も含めて筆頭を中心に若い衆が相談して決めていく。筆頭の頭のなかには外題に必要な役者の人数が常にある。役者を揃えるのは筆頭の責任だが、若い衆のなかでも相談する。正式にお願いをするのは決め酒のときだが、それ以前から内々にお願ひしておく。具体的な配役は振付が役者を見て決定し、若い衆はそれに従う。

平成二三年の役者 最初は五人の役者が選ばれていたのでエビスの役を入れようと考えていたが、途中から四人にかわった。配役は振付が役者の適正や年齢・身長などを見て決める。

【月宮殿（田町組）】

役者の決め方 筆頭を中心に若い衆が決定する。町内あるいは町内出身者の子どもや若い衆の子どもから主に選ぶ。

役者と御幣持 昔は、御幣持を受けたら役者にはなれなかった。御

幣持は神様に近く、役者より一段上のため、役者に降りることができない。役者は花形だから、それを嫌がって御幣持を受けたがらない人もいた。ただし、現在は御幣持を受けたら役者にならないということはない。

役者の年齢 役者になるのは小学校入学時から卒業までの男子。

役者になる子ども 小さい頃から子どもたちのことは知っているの
で、性格などはある程度わかっている。

役者までの流れ 出番前年の一二月頃には、既に役者を誰にするかは内々では決まっており、内諾もとつてある。

小舞台 小舞台（舞台方のこと）は役者を経験した子の方がよい。

【青海山（北町組）】

選出される子ども 町内在住者およびその親戚の子ども、若い衆の子どもを主に選んでいる。平成二三年はスポーツ少年団をとおして選んだ。

【諫鼓山（御堂前組）】

役者 狂言の役者はよほどのことがない限り町内在住者か町内出身者と血縁のある子どもで賄う。現在町内在住の子どもは二人しかない。また、自町に子どもがいても他町の上手な子を借りることもある。

借り役者 現在でも借り役者をするが、借り役者の親も若い衆に勧誘するため、親があまり借り役者をさせたくない。前回諫鼓山に出た子のうち一人を、振付の水口氏が壽山に勧めて借り役者をした

ことがあった。

役者の年齢 役者は小学生が中心だが、小学校就学前の子どもが役者をすることもある。

【高砂山（宮町組）】

子どもの見定め シャギリの練習のなかで役者の候補を見定めることもある。借り役者もする。

【壽山（大手町組）】

町内に限定する傾向 狂言は町内の子どもが中心である。借り役者の場合でも親戚関係で町外の子どもが加入するくらいで、シャギリと違い閉鎖的である。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

役者の決め方 役者は原則的に町内の子どもがする。芝居に合わせて人数を調整する。最多で六、七人で、平均五人くらいである。まず町内の子に打診するが、断られると町外の知り合いに頼む。商売人が多いので今は青年会議所の関係者に頼むことが多い。役者の年齢は中学一年生までの子どもである。小さな子どもの方が曳山の舞台によく似合う。鴨居よりも背が高くなると舞台と不釣合になる。配役は振付が決める。

【翁山（伊部町組）】

昭和三、四〇年代の役者決め 候補の子どもを寄せて振付に決めてもらう。たくさんの子を寄せるわけではないが落ちた子どももいた。

昔は家柄も関係していたといわれる。事前に子どもを見て相談することもある。役者を決めるときに家の経済状況まで考慮することはない。

借り役者 昭和二〇年代後半は借り役者の全盛期だった。昭和三年の「鎌倉三代記」では米原の子どもを借り役者した。借り役者の子を役者係が車やタクシーで送迎した。戦前は自転車で米原まで送迎したこともあった。昭和四三年の「男の花道」の主役は月宮殿に出ていた子どもで、なかなかよくできた。しかし、昭和四〇年代頃から、徐々に高い町費を払っているのに借り役者をすることに疑問を感じる考えが町内から出ていた。そして、昭和五五年頃から、自町に子どもがいれば、よそに頼むことはしなくなった。取り決めではなく自然とそうなった。

役者の増加 昭和五〇年代は町内に一学年当たり一〇人も子どもがいた。一役を何人かで演じて、一〇人ほどで狂言に出たこともあった。当時は役者の世話をする若い衆が大勢いたため役者が多くても問題なかった。

役者の選び方 昭和五〇年代は筆頭が子どもを選んだ。親からアピールされることはない。祭りに貢献してくれる親のところに役者を頼みにいく。

性格の考慮 かつて役者の一人が大きな声を出してくれず、芝居が失敗したことがあった。台詞を減らしたが、本番でも駄目だった。一人が駄目だと芝居全体が駄目になる。失敗後は、学校に子どもの性格などを聞きに行くこともあったが現在はしていない。

舞台方の人選 かつて、舞台方は二人選んだ。昭和六三年まで一番

山になると、一人は三番叟をするため、しつかりしたある程度年長の子どもを選ぶ。舞台方と役者は始めから分けて依頼した。現在、舞台方は一人である。

【常磐山（呉服町組）】

役者の決め方 祭りの半年前に立ち上げる狂言準備委員会で、外題とともに振付と相談して決める。どの役になるかについても狂言準備委員会で決める。

役者は、まず町内の子どもを最優先とし、つぎに山組の人の親戚・縁者から、それでも適任者がいなければシャギリに来ている子どもや若い衆の友人のついでを選ぶ。

【萬歳樓（瀬田町組）】

役者の決め方 筆頭など役員の子どものは避け、それ以外の山組内の子どもを選ぶ。自町の子どもの以外にも借り役者をするが、シャギリに来ている子どもたちのなかから選ぶ。少しでも山組のことを知っている子どもがよい。

第四項 三役の決め方

ここでは現在の三役の決め方に焦点を当てる。

三役は基本的に、山組が振付に依頼すると、振付が三味線と太夫を指名することが多い。山組は出番の前年に振付に依頼する。基本的に振付は前回と同じ人に依頼するが、高齢の場合などの理由でかえることもある。依頼の仕方は山組によって異なり、口約束もあれば、決め酒をして契約するところもある。

現在一二の山組のうち、六つの山組が三役のいずれかに三役修業塾の塾生や出身者を当てている。三味線が一番多く六つの山組で出演している。太夫は三つの山組で出演し、振付は二つの山組で出演している。三役修業塾以外の三役の出自は様々である。振付は、松竹の関係者だけでなく、北海道などの地芝居の役者などもある。また、太夫と三味線は松竹所属の人以外に、名古屋や岐阜で別の稼業を持つ人もいる。近年は、金銭面を考慮して三役を三役修業塾の塾生に依頼する傾向にある。

【春日山（本町組）】

三役の決定 平成二三年は振付がかわったが、三味線や太夫は以前からの人をお願いしている。両方とも諫鼓山の振付、水口一夫氏の紹介で来てもらっている。三役修業塾からお願いすることについて若い衆のなかで議論はしているが、プロを呼んでいいものを上演するという自負心が強いので現状では難しい。

振付藤間勘輝氏への依頼の仕方 先に中老から藤間氏へ振付の打診をし、三年前に春日山が出番のときに改めて依頼した。出番の一年前に京都の飲食店で決め酒をした。前の負担人と今の負担人、諫鼓山などで振付をする父親の水口氏などと一緒におこなった。

三味線豊澤浩樹氏 昭和三九年生まれ。元松竹の竹本連中である。一八〇歳は国立劇場の研修生で、二〇歳から一〇年間国立劇場で三味線をした。その後フリーで三味線をしている。日本舞踊の三味線が主な仕事である。現在春日山のほかに壽山・萬歳樓にも出演している。

依頼方法は決め酒をもらったり、口頭の約束のみと山組によって異なる。毎年出ているので「三年後にまた」「二年後に」と挨拶で済ますこともある。来年（平成二四年）は壽山での出番のため、長浜にいる間に壽山の人が「いよいよですね」と挨拶に来る。去年（平成二二年）に出演した萬歳樓も挨拶に来る。

業界では長浜曳山祭は有名なため、長浜に来る以前から知っていた。長浜に来るきっかけは壽山などで振付をする水口氏からの依頼であった。一五年前、水口氏から三月中頃「義経千本桜」ができるかと電話があり、急に依頼された。

豊澤浩樹氏のほかの三役との付き合い 春日山で太夫をしている竹本弥清氏や、月宮殿で三味線をしている豊澤清次郎氏（太夫のときは竹本三樹太夫）との仕事もある。水口氏のかかわっている福井県丸岡市の子ども歌舞伎などにも出ている。練習中は、ほかの山組の稽古場にも三味線は比較的自由に出入りできる。

【月宮殿（田町組）】

振付岩井小紫氏 月宮殿には四回来て、三回振付を担当した。もととは夫である中村福太郎氏が振付をしていて、その補助で女形の指導をしていた。昨年从中村福太郎氏が病氣のため、一人で来るようになった。ほかに翁山でも振付をしている。

豊澤清次郎氏 群馬県在住。家が劇団をしており、清次郎氏自身も地歌舞伎で役者をしたり、指導をしたりしている。人が少ないため、三味線・太夫・小道具などすべてに携わっている。三味線も弾くし、太夫もする。小道具も作る。

平成二〇年出番山のときの太夫・三味線の依頼時期 平成一九年一〇月一六日に正副負担人の二人が米原曳山祭に出かけ、太夫と三味線に来年度の出演を依頼した。

【青海山（北町組）】

三役 振付は地元の人で、三味線は三役修業塾の塾生である。

【諫鼓山（御堂前組）】

三役の決め方 三役や衣装屋などはすべてプロで揃える。太夫と三味線は振付の水口一夫氏が指定する。

振付水口一夫氏が長浜に来たきっかけ 水口氏によると、水口氏が長浜に来た昭和五〇年代後半は、長浜に来る振付が少なかった。いたとしても旅の狂言の長老で、彼らは高齢で動けないから口頭で指導していた。そこで長浜の能楽師と萬歳樓のT旅館の主人から依頼された。水口氏は当時も松竹で役者の振付けをしていたが、長浜から依頼されたときは、旅回りのようなクサイことはできないと依頼を断った。クサイとは、お客に受けるように、大げさな、過剰な所作にすることである。それはそれで面白いが、長浜の振付けの手法は松竹での振付けとは種類が違いうから無理だと断った。しかし、どうしても助けてくれと頼まれて始めた。

昭和五八年、まだ三〇代だったため、若い先生が来たと驚かれた。当時、長浜曳山祭についての知識が少なかったため、萬歳樓と常磐山の二か所を同時に振付できると思いどちらも引き受けた。しかし同じ年にかけて持ちはず、萬歳樓だけに行くことになった。常磐山には松竹の役者の中村芳三郎氏を紹介した。しかし中村芳三郎氏

は立役の人で女形ができないので、その年限りだった。

振付の得手不得手 振付にも得手不得手がある。女形が得意な人もいれば立役が得意な人もいる。

太夫竹本朋太夫氏が長浜に来たきっかけ 昭和六〇年に水口氏の紹介で来たのが始まりである。昭和四〇年代から平成にかけて曳山祭で三味線をしていた豊澤重松氏が、水口氏に若い人の紹介を依頼し、水口氏が朋太夫氏を推薦した。当時、朋太夫氏は養成所を卒業して二年目で仕事空いていた。

三味線豊澤勝二郎氏が三味線をするようになった理由 長浜出身だが山組でない所の出身である。しかし、長浜曳山祭は小さいときから見ていて、いつもうらやましく思っていた。その後、三役修業塾を紹介され入塾し、その後国立劇場の養成所に行った。今は松竹で三味線をしている。

【高砂山（宮町組）】

三役 高砂山はプロに頼む。三役のお礼の金額は大きくなるが、それでもプロがよいと考えている。振付と太夫・三味線はグループを組んでいるため、振付を頼むと、太夫と三味線がついてくる。三役修業塾ができる前から地元の人が曳山に上がることもあった。太夫で上がっている人もいたが、三味線がプロだと太夫と合わせてもらえず、何かを持っていつて合わせてもらうようお願いしたりした。昔は三役を全員町内の旅館に泊めていたが、現在、振付だけは町外の旅館に泊まらせている。

よその狂言への見学 振付が高齢になると、新しい人を探すため、

垂井などのよその狂言にリサーチに行く。

出番への準備 来年（平成二四年）が出番山なので、外題の候補をいくつか考えている。振付に相談し、役者に合わせて決めることになる。平成二三年五月の石川県小松市のお旅まつりに行き、そこでも振付をしている市川団四郎氏に依頼をする。条件は「前回並みに」と口頭で約束している。

【壽山（大手町組）】

現在の振付 振付は松竹の水口一夫氏を呼んでいる。
教え子との関係 水口氏の教え子や担当した山組の筆頭の結婚式に呼ばれることがある。親子二代を教えることもある。壽山の教え子を中心に水口組というグループがあり、一緒に食事をしたり稽古を見にいたりする。

【狸々丸（船町組）】

三役の探し方 かつては三役は若い衆が探してきた。垂井・米原・揖斐・小松などの祭りで、評判のよかった人を見つけたという方法を採用した。現在では負担人が中心となって、つてを頼って探してくる。振付を一度頼むと、次も頼むようになる。振付が亡くなった場合は新しい人を探すが、非常に大変である。三味線や太夫から、新しい振付を紹介してもらうこともある。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

現在の振付 平成二三年に青海山の振付をした川村和彦氏に来年（平成二四年）の出番を頼む。筆頭は、祭りのときに振付に挨拶に行く。三役は基本的に負担人と筆頭とで決める。値段の都合上、三役修業

塾に頼むことが多い。プロを呼べるのなら呼びたいが、費用の問題がある。また、プロは四月は忙しいため、調整も大変という。

【翁山（伊部町組）】

現在の三役 プロを呼びたいが、金銭的な問題がある。現在は太夫と三味線を三役修業塾の人に依頼している。
三役、衣装屋にとつての長浜の狂言のよさ 長浜の狂言は、よその子ども歌舞伎などと比べて稽古期間が長い。振付にとつても一番お金を貰えるし、衣装も毎年かえるので衣装屋も儲かる。
昭和三〇年代の三役への依頼 三役は一から探さなければならない。現地に行き、契約する。一度契約したら、その後は「今年もお願いします」と毎回依頼に行く。

【常磐山（呉服町組）】

三役の決め方 祭典委員会で協議し、代表負担人が中心におこなう。
現在の振付 三回前の出番山のとときから嵐孝宏氏が担当している。女形の歌舞伎役者である。長浜曳山祭の狂言を見て感動したため、自ら振付を買って出た。
三役の決定時期 三役は出番の一、二年前には考え始めている。

【萬歳樓（瀬田町組）】

役者の決め方 筆頭など役員の子どもは避け、それ以外の山組内の子どもを選ぶ。自町の子ども以外にも借り役者をするが、シャギリに来ている子どもたちのなかから選ぶ。少しでも山組のことを知っている子どもがよい。

■戦後の三役

ここでは、戦後から現在に至るまでの三役について長浜との関係に焦点を当てて見ていく。論考編に掲載している「長浜曳山祭における三役の変遷とネットワーク」も合せて見ていただきたい。

昭和二〇年～三〇年代

【振付】

松本麗蝶氏（昭和三十一年～平成二年）岐阜県関市の人。月宮殿では昭和三五年度の「鳴戸」から来てもらった。昭和三四年に米原祭に月宮殿の囃子方がシャギリを頼まれていったとき、麗蝶氏が上演していた「鳴戸」を見て、翌年の月宮殿の狂言の振付を頼んだ。振付だけでなく役者も借りてきた。

通常曳山狂言では上演しない外題や演出をした。昭和三五年「鳴戸」、昭和三八年「摂州合邦が辻」、昭和四一年「義士伝 赤垣源蔵出立」など。「鳴戸」はお鶴殺しまで長くかかり、展開の速い曳山狂言では敬遠されるが上演した。

月宮殿は麗蝶氏が来てから芝居が上手になったこともあり、麗蝶氏に最後まで振付をお願いしていた。月宮殿は裕福な人が少なく、祝儀の多いハツアガリばかり役者に行っていた。ハツアガリとは、初めて曳山狂言に出演することである。ハツアガリのため、芝居が上手くなかった。しかし、麗蝶氏はハツアガリの子でも上手にさせた。麗蝶氏の振付けは上手だが指導は今と比べると厳しかった。

大谷廣右衛門氏（昭和三三～三八年）岐阜市で縫製屋を営んでいた。指導のときは自分で身振りを見せて教えていた。山組の人によると

昭和三二年に諫鼓山で振付をしている横田文三郎氏は大谷廣右衛門氏と同一人物だという。高砂山も昭和三六年に大谷廣右衛門氏に振付を頼んだが、新しい演出だと評判だった。

市川延次郎（延二郎）氏（昭和三四～平成三年）岐阜市柳ヶ瀬の人。同じく岐阜の大谷廣右衛門氏が市川延次郎氏を孔雀山に紹介したと聞いている。本業は人形屋で、化粧が上手だった。芝居が盛んな美濃ではあちこちで振付をしていた。滋賀ではほかに米原曳山祭にも行っていた。地芝居で人気のある「絵本大功記十段目」と「一谷嫩軍記三段目熊谷陣屋」・「仮名手本忠臣蔵七段目」を多く振付けした。しかし繰返し頼むと一緒の外題ばかりになった。

平成二年に月宮殿は松本麗蝶氏の体調が悪くなり、途中から市川蝶昇氏に交替したが、化粧をすることができなかったため、延次郎氏に化粧だけ来てもらった。

【太夫】

豊竹吾妻太夫氏（昭和二五～三九年）長浜市主計（旧浅井町）の人。本業は百姓で浄瑠璃が好きでしていた。曳山の浄瑠璃に合っていた。声を大事にしている、練習のときはあまり声を出さず、祭りのときはマイクなしでもよく聞こえるほど音量が豊かだった。稽古の間には生卵をよく飲んだ。

豊竹常盤太夫氏（昭和二七年）長浜市相撲庭（旧浅井町）の人。

竹本（鶴沢）品太夫氏（昭和三一～四五年）太夫だが三味線もでき、昭和三四年には竹本品太夫として高砂山で、昭和三五年には鶴沢品太夫として月宮殿で三味線を弾いている。

竹本豊太夫氏（昭和三九～五二年）大阪の人。三味線も弾ける人で、

その世界でも顔が広い人だったという。

【三味線】

伊吹（鶴澤）甚造氏（昭和二五～三三年）長浜市湖北町河毛（旧湖北町）の人。本職は百姓。当時は田舎芝居が盛んで地元で弟子を多く持っていた。器用な人で振付もした。戦前から曳山祭に出ていた。

戦後曳山祭が再開したときから長浜に来ている。このような人たちが一生懸命尽力してくれたため、曳山祭が復興したともいえる。

鶴澤文章氏（昭和二三～四五年）愛知県蒲郡市の人。文章氏の葬式で山組の人が豊澤重松氏と出会い、曳山祭の三味線を依頼した。

昭和四〇～五〇年代

【振付】

関三右衛門氏（昭和四三～四七年）岐阜県墨俣の人。翁山は大谷廣右衛門氏が来られなくなり、振付を探そうにもつてがなかった。そこで鶴澤甚造氏に相談すると三味線の鶴澤文章氏を紹介された。さらに鶴澤文章氏に関三右衛門氏を勧められ振付をお願いした。ちなみに関氏が振付をしたときの三味線は鶴澤文章氏である。プロではないというが、教え方は丁寧だった。上演する外題は時代物が多かった。

市川眼笑氏（昭和四三～五〇年）京都市（西陣か）の人。諫鼓山は眼笑氏を竹本豊太夫氏に紹介された。眼笑氏は昔役者をしていた。

中村芝蝶氏（昭和四八～平成一〇年）愛媛県今治市の人。中芝居の役者だった。芝蝶氏は岩井小紫氏の母方の祖父の弟子で、岩井小紫氏の父親が太夫元を務める劇団にも在籍していた。その劇団が解散後、豊澤重松氏が太夫元をする劇団にも在籍したことがあった。岩

井小紫氏によると芝蝶氏は女形で、年齢を重ねても婆役ができず若い女性の役をしていたため、徐々に活躍の場がなくなっていたとのことである。

翁山は関三右衛門氏が高齢で振付けできる外題が少なかったため、ほかの振付を探すことになった。そこで若い衆が習っていた長浜の能の師匠のついで芝蝶氏を呼んだ。翁山で頼む前、昭和四八年に鳳山に芝蝶氏を紹介して、様子を見てから翁山の振付を依頼した。

振付けできる外題が多く、よその山組も含めて、いつも異なる芝居をした。衣装や小道具にも詳しくあった。振付けも細かく指先まで指示した。綺麗に化粧ができた。女形のためか時代物が少なく、世話物が多かった。ただ、最後の方は芝蝶氏が振付けたい外題ばかりになり山組の意向が反映されにくくなり、ほかの振付にかえる山組もあった。

豊澤重松氏と芝蝶氏が組むことが多く、重松氏が三味線をしていた諫鼓山でも昭和五三年から芝蝶氏が振付をするようになった。

水口一夫氏（昭和五八年～現在）京都祇園のお茶屋の出身。幼い頃から踊りなどの芸事を習っていた。大学卒業後、一時サラリーマンをしていたが、辞めてからは、国立劇場青年歌舞伎やミュージカルなどの演出を幅広く手掛ける。現在は松竹株式会社関西西演劇部に在籍している。地方歌舞伎では、長浜のほかに石川県小松市の子ども歌舞伎などの振付をしている。現在は壽山と諫鼓山の振付をしている。平成二三年の春日山の振付である藤間勘輝氏は息子である。

市川升十郎氏（昭和五八～平成八年）愛媛県豊橋市の人。昭和五七年まで森下操が振付していた青海山・猩々丸・孔雀山の振付をした。

升十郎氏は愛知県豊川市に市川少女歌舞伎を設立し興行主だった。山組の人によると升十郎氏はもともと大歌舞伎の大部屋にいた人という。のちに自分の劇団を設立した。長浜のほかに愛知県小原村（現豊田市）など多くの農村歌舞伎にも教えていた。

升十郎氏に振付を頼むと、三味線・太夫・衣装・鬘・化粧すべてセツトで請負った。山組は升十郎氏にお金をまとめて支払い、升十郎氏から太夫・三味線などに支払われる。升十郎氏の場合、三味線と太夫が稽古に入るのは八日からとなっていた。升十郎氏が辞めたあと、青海山・狸々丸・孔雀山では三味線と太夫は八日から稽古に加わっている。また、青海山など山組によつては、今も弟子の女性たちが衣装・鬘・化粧を請負い続けている。

中村芳三郎氏（昭和五八年）松竹の役者である。常磐山で「鳴神」を振付けした。水口氏の紹介である。女形ができなかった。

【太夫】

中井清太郎氏（昭和四一〜五七年）鶴澤文童氏の紹介で来た人。

竹本辰美太夫氏（昭和四六〜平成四年）岐阜県の人。翁山の中老によると、とてもよい声をしていて、とくに昭和四六年の関三右衛門氏・竹本辰美太夫氏・豊澤重松氏の組合せは評判がよかったという。

昭和五〇年急遽春日山が出られなくなり、当時總當番だった翁山の中老が責任をとって翁山が出ることになった。急だったので、役者の台詞が少ない人形振りの「安珍清姫 日高川」を奉納した。その分浄瑠璃の語りが多くて、辰美太夫氏は「エライ、おろさせてくれ」と辞退した。そこで芝蝶氏が竹本米太夫氏を連れてきた。しかしその次の出番からは再び辰美太夫氏が太夫をすることになった。鶴澤

扇玉氏の師匠である。

竹本米太夫氏（昭和四九年）四国から来た人。高齢で、太夫の語りが多い外題だったので、練習のときは米太夫氏が自ら録音したテープを流した。

竹本い太夫氏（昭和五一〜五九年）いろはのいの字で、ハジメデュウと読む。地芝居の人だと聞いている。

竹本紀六太夫氏（昭和五四〜六三年）愛知県豊橋市の人。市川少女劇団でずっと太夫をしていた人である。

竹本泉太夫氏（昭和五七年）松竹の大歌舞伎の人。

竹本秀太夫氏（昭和五八〜平成二年）翁山で竹本辰美太夫氏が来られなくなり、急遽頼んだ。高齢で声が出なくて心配だったが、いざ本番になるとよかった。やはりプロだと思った。扇玉氏や芝蝶氏とよく一緒に出ていた。秀太夫氏は重松氏の同級生で、重松氏と同じ愛知県旧小原村出身。地芝居の人。最後は愛知県西尾市に住んでいた。

竹本綿昇氏（昭和五八年）二代目中村鴈治郎氏の甥。歌舞伎のときは中村亀鶴という芸名で出演していた。

竹本文太夫氏（昭和五八〜六〇年）愛知県旧小原村の地芝居の人。市川升十郎氏と組んでいる。

【三味線】

豊澤重松氏（昭和四六〜平成一一年）愛知県旧小原村出身。秀太夫氏と同郷で同級生である。晩年は娘と愛知県西尾市で暮らしていた。昭和四六年以降亡くなる前年までほぼ毎年出演した。

岐阜駅前に劇場があり、そこで重松氏が小芝居の三味線をしているところを先代中村吉右衛門氏が見てとりたてた。松竹の大歌舞伎

では市川猿之助氏に気に入られ、猿之助氏の舞台に出演することも多かった。

山組の人によると、ガンガン鳴らして、豪快な演奏が印象的だったという。弾き方だけでなく掛け声も独特で「ハッホ、ハッホ」などといっていた。山組の人に親しまれ、大向うでは松竹の三味線にちなんで「国立！」と掛けられたりした。

重松氏と中村芝蝶氏は同じ劇団にいたり、重松氏が芝蝶氏を長浜に誘ったこともあり、芝蝶氏が長浜で振付を辞めるときは自分も辞める、と重松氏はいっていた。実際、芝蝶氏は平成一〇年を最後に、そして重松氏は平成一一年を最後に曳山祭の三味線を退いた。

重松氏は三味線だけでなく、三役の育成を目的に長浜曳山文化協会が中心となって設立した三役修業塾の立ち上げに尽力した。三役修業塾の初代顧問でもある。

鶴澤友太郎氏（昭和五一〜五六年）愛知県の市川少女劇団で三味線をしていた人。鶴澤扇玉氏の師匠の師匠である。

豊澤（中村）玉次氏（昭和五五〜平成一四年）岐阜県美濃加茂市の人。大正一〇年前後の生まれ。本業は豆腐屋である。自身も女形の役者もしていたこともあり振付けもできる。平成一三年に常磐山では玉次氏が振付をして、同時に三味線もした。玉次氏は、子どもの頃長浜の曳山狂言に出演している。戦前は劇団ごと借りてきたことがあり、玉次氏が所属した美濃加茂の劇団ごと呼ばれた。

鶴澤泰二郎氏（昭和五六、七年）松竹の現役の三味線方である。

野澤賢治氏（昭和五七〜現在）国立養成所出身で、以前は松竹に所属していた。重松氏の国立養成所での生徒で、重松氏が曳山祭に出演

できないときに、賢治氏を出していた。豊澤を称していたこともある。

鶴澤扇玉氏（昭和五七〜平成一九年）愛知県旧小原村の人。本職は家具屋である。市川升十郎氏が連れてきたという。平成一三年を最後に曳山祭に出演していなかったが、平成一九年の孔雀山で、豊澤龍三氏が出られなくなり一時的に復帰した。曳山祭をやめたあとと垂井曳山祭りには出演していた。

昭和六〇年〜現代

【振付師】

柳原照子氏（昭和六一年）女性で、愛知県春日井市の人。一〇歳から芝居を始め、一四歳で初舞台を踏む。そのあとは岐阜・愛知を中心に全国を巡業する。三代目市川海老十郎氏などと舞台に立つこともあった。戦後から岐阜歌舞伎・春日井歌舞伎・東海歌舞伎（東海市）で振付をしていた。時代物・世話物問わず振付けできる。

沢村曙當氏（平成元〜六年）愛知県安城市の人。三河万歳の伝承者で、三河万歳の保存会の人である。特徴的な外題をする人でもあった。平成四年の常磐山では「二十四孝 十種香・狐火」、さらに平成五年の月宮殿では「義経千本桜」と二回続けて狐ものをした。また、平成六年の高砂山では「心中宵庚申」という意地悪婆さんの出る世話物をした。月宮殿は、それまで振付をしていた松本麗蝶氏が亡くなったため平成五年から曙當氏に振付を頼んだ。

中村和歌若氏（平成二年）京都を中心に巡業していた旅役者。和歌若氏自身はこれをドサまわりといった。戦後兵庫県播州に落ち着き、劇団は播州歌舞伎と名乗った。役者の減少などにより一時衰退していた播州歌舞伎を、昭和六三年地元の小学生を中心に指導し始めた

ことがきっかけで復活させた。平成二年に春日山の振付をしたが、近隣では垂井曳山祭りにも振付として行っていた。山組の人によると垂井との繋がりで長浜に來たという。

市川団四郎氏（平成四年～現在）岩井小紫氏の弟。元は父親が太夫元をする中歌舞伎で歌舞伎役者として全国を巡業していた。その後、北海道函館市を中心に北海道を巡業する劇団の太夫元（興行主）であり座長の初代市川団四郎の娘婿になり、函館を中心に歌舞伎の指導をしている。長浜へ來たきっかけはかつて同じ劇団にいた中村芝蝶氏からの紹介である。長浜以外に米原祭などでも振付をしている。小紫氏によると芝蝶氏の存在が団四郎氏が長浜で振付をする後押しになったという。

中村竹昇氏（平成七～一二年）愛知県新城市の地芝居の人。お百姓をやっている、もとは公務員だという。新城市にある地芝居の振付をしていた。ちなみに新城市は地芝居の盛んな地域で複数の団体が存在する。愛知・岐阜から來ていた竹本美功太夫・豊澤玉次などの三役や衣装屋からの紹介で來た。

大谷白菊氏（平成九年）岐阜県各務原市の人で女性である。升十郎氏が身体が悪くなり來られなくなったため、白菊氏に頼んだ。夫の大谷友右衛門は大谷興業という、芝居ごとの請負をする興業主だった。各務原市の村国神社の祭礼に氏子が地芝居を奉納するために建設された村国座という芝居小屋がある。白菊氏はここで奉納する子ども歌舞伎の振付をおこなっていた。また、揖斐川の歌舞伎も指導していて、かつて白菊氏に誘われて、竹本団勇氏の師匠と、三役修業塾の指導をしている豊澤千賀龍氏、そして竹本団勇氏が上演した

こともあった。白菊氏は、子供を熱心に教える人で評判だった。

市川松尾氏（平成一〇～二一年）桑名の人。もとは澤瀉屋（おもだかや）の市川である。現市川猿之助氏の父、猿翁氏の弟子。若い頃（昭和二〇年代）猿三郎氏の巡業芝居を見て感動して歌舞伎の世界に入り、松竹に在籍した。恰幅のいい人だったが、大歌舞伎では女形だった。初めは市川春猿と名乗ったがその後改名して三代目市川松尾となる。その後松竹を辞め役者を廃業したが、故郷の桑名などで子ども歌舞伎の指導をした。長浜では青海山・狸々丸・孔雀山の振付をした。平成二一年に亡くなった。

中村福太郎氏（平成一三年～二〇年）京都の人。岩井小紫氏の夫。元々役者の家の出身ではない。一六、七歳で関西の中歌舞伎の役者である中村時子氏に弟子入りした。その後、岩井小紫氏の父親が太夫元をしていた中歌舞伎に所属し女形として全国巡業した。岩井氏とはライブル関係でもあった。

劇団が昭和四九年に解散したあとは、豊澤重松氏の推薦で、三味線として東京の松竹に三〇年以上所属した。三味線のときは豊澤時若と名乗っていた。役者をしていたこともあり、東京では松竹の若手役者が立ち上げた舞台創造研究所で振付もしていた。

長浜には岩井小紫氏の弟である市川団四郎氏の誘いで來た。平成二〇年の月宮殿の振付をしていた頃から福太郎氏は体調を崩し、妻である岩井小紫氏が振付することになった。平成三年に亡くなった。
嵐徳江（中村まつ葉・嵐孝宏）氏（平成一六～現在）東京都出身。歌舞伎の家の出身ではなく、国立劇場一四期歌舞伎俳優研修出身。嵐徳三郎氏の弟子になった。それで、「徳」をもらって徳江と名乗っ

た。その後、徳三郎氏が亡くなって、中村松江氏についた。最初からの弟子ではないので、「松」は漢字でなく、「まつ」として、中村まつ葉と名乗った。現在は松竹を辞めて本名の嵐孝宏と名乗っている。長浜曳山祭を見にきた際に曳山狂言に感動して、その後振付をすることになる。

岩井小紫氏（平成二三年〜現在）愛知県岡崎市出身。父親が太夫元をする中歌舞伎の役者として岡崎市を拠点に全国を巡業した。弟は市川団四郎氏、夫は中村福太郎氏、元座員に中村芝蝶氏がいる。岩井氏のいた歌舞伎の劇団は座員が四、五〇人いて、東京・大阪の松竹の大歌舞伎を除くと大規模な部類に入った。大歌舞伎よりも小さいが比較的大きかったため中歌舞伎といった。中歌舞伎には大歌舞伎で役のつかない役者や若手の役者が勉強のために所属することもあった。岩井氏によると、座員が多く金銭的な面も含め力があつたため全国で最後まで残った地方の歌舞伎の劇団だったという。なお小紫氏は昭和四五年に劇団引退後三味線や踊りの指導や子ども歌舞伎の演出などをしていた。

市川団四郎氏の誘いで夫の中村福太郎氏と長浜に来ることになったが、当初は田舎の地芝居みたいなことはできないと、乗り気ではなかった。しかし、長浜駅を降りたら町に活気があつて印象が変わった。そしていざ芝居を見ると自分ならこうするのとか、この振付の演出はおもしろいなどと意欲が湧いてきて、振付を引き受けることにした。当初は福太郎氏の補佐として長浜で振付をしていたが、福太郎氏が体調を崩してからは小紫氏のみで振付をするようになった。再び外題を勉強しなおして祭りに臨んでいる。

千川貴楽氏（平成二三年）山形酒田市の人で舞踊の家元である。現在は東京在住。国立養成所出身で松本幸四郎氏の弟子。市川松尾氏が急死して、衣装屋に紹介されて長浜に来ることになった。

【太夫】

竹本朋太夫氏（昭和六〇年〜現在）国立養成所の六期生。水口氏の紹介で長浜に来たのが最初。豊澤重松氏が竹本綾太夫氏を頼んだところ、綾太夫氏は舞台があり都合がつかず、朋太夫氏が紹介された。養成所を卒業して二年目の年の春だった。

竹本団勇氏（昭和六一年〜現在）愛知県名古屋市中に在住で、稼業は野鍛冶である。現在も営業している。豊澤千賀龍氏の弟子で、千賀龍氏の師匠である竹本団龍氏の一字をもらって団勇となった。

最初は名古屋のスーパー一座で役者をしていた。なお、スーパー一座には市川升十郎氏も指導にきていた。役者として、松王や牡丹景清・幡随院長兵衛なども演じた。劇団として歌舞伎を上演するなら、義太夫も自分たちでしようということになり、三〇年くらい前から義太夫を習い始め、名古屋で春と秋に義太夫を語る中部素義会に出演したりした。名古屋には師匠が多かったので、義太夫が盛んだった。義太夫を何年かしているうちに、段々と役者より義太夫の方が面白くなっていった。面白いと思っただけは、日吉の舞台で竹本美功太夫氏の義太夫を聞いてからである。それから本格的に義太夫をするようになった。

長浜に来るようになったきっかけはスーパー一座で升十郎氏に声をかけられたこと。

野澤吉哉氏（昭和六二〜平成二年）太夫と三味線を両方している。

竹本団力氏（昭和六三年）豊澤重松氏の弟子。岐阜県垂井町や滋賀県米原市の子ども歌舞伎にも出演している。垂井では三役をすべてこなす。

芳村伊十佐久氏（平成三年）長唄の人。この年は浄瑠璃ではなく長唄で上演している。

竹本司太夫氏（平成三年）岐阜県本巣市真桑の人。中部素義会にも出ている。中部素義会では女性と掛け合いをしていたが、そのままの高い調子で曳山でも語っていた。

竹本美功太夫氏（平成五年〜現在）美功氏は岐阜県下呂市の人。竹本美善太夫氏が美功太夫氏の師匠である。下呂市の鳳凰座で女形もしていた。平成二年に米原市の文化産業交流会館で「新口村」を上演するときに、太夫をしていた竹本秀太夫氏に別の公演が入ってしまい、美功氏を紹介された。そして平成五年の祭りからは美功太夫氏が来るようになった。なお、美功太夫氏と豊澤千賀龍氏は同郷の幼なじみで芝居仲間。

竹本清人氏（出月清人）（竹本弥汐太夫）（平成六〜二十一年）横浜市の人。本職は公認会計士である。竹本弥乃太夫の弟子で、「弥」の一字をもらった。壽山は水口氏から弥汐太夫氏の紹介を受けた。

西邑粹龍氏（平成九年）元三役修業塾塾生。長浜市神前（旧長浜市）の人で、もともと詩吟と剣舞をしていた。

竹本龍一氏（平成一二〜二十二年）三役修業塾塾生。月宮殿の人。

竹本龍豊氏（平成一五〜二十二年）三役修業塾塾生。月宮殿の人。

竹本千永氏（平成七〜一六年）三役修業塾塾生。長浜市七条に在住。

竹本甚太夫氏（平成二二年）三役修業塾塾生。翁山の人。

竹本弥清太夫氏（平成二三年）今年の春日山に来ている。竹本弥乃太夫氏の弟子である。平成一八年の壽山は竹本弥汐太夫氏で公式発表したが、健康上の理由で、急遽竹本弥清氏が来た。

【三味線】

西邑龍晃氏（現・豊澤長一郎）（平成七年）もと三役修業塾塾生。高校を卒業後国立養成所に入り、現在は松竹所屬である。

豊澤浩樹氏（平成八年〜現在）国立養成所出身。松竹に在籍していたが、今はやめてフリーである。長浜には一五年前水口一夫氏からの依頼で来るようになった。

豊澤賀祝氏（平成一二年〜現在）三役修業塾塾生。鳳凰山の山組。魚屋を営む。岐阜県垂井町や滋賀県米原市の子ども歌舞伎でも演奏している。

豊澤勝二郎氏（平成十四年〜現在）山組ではないが、長浜市出身である。三役修業塾で勉強したが、国立養成所に進み、現在プロの三味線として松竹に所屬している。小さいときから曳山祭で聞く豊澤重松氏のファンで、東京に行つて弟子入りたいと頼むと、三役修業塾を紹介された。高校を卒業後、国立養成所の一三期生として入った。

豊澤龍三氏（平成一五年〜現在）三役修業塾塾生。月宮殿の人。

豊澤翁賀氏（平成二二年〜現在）三役修業塾塾生。

豊澤清次郎氏・竹本三桝太夫氏（平成二二〜現在）群馬県の人で、義太夫を語るときは三桝太夫、三味線を弾くときは清次郎と名乗っている。地元では劇団の興行主である。化粧・小道具もする。ホソ（細棹三味線）も弾ける。

年号（西暦）	山組名	外題（通称・俗称）	振付	浄瑠璃	三味線
昭和 25 年	諫鼓山	弁慶上使	三桝源九郎	豊竹吾妻太夫	鶴澤美昇
	春日山	寺子屋	片桐小三郎	豊竹美玉太夫	西島安造
	高砂山	一の谷流し枝の段	片岡市太郎	大沢重一	伊吹甚造
昭和 26 年	月宮殿	牡丹景清	片桐小三郎	豊竹美玉太夫	伊吹甚造
	孔雀山	熊谷陣屋	嵐 冠十郎	豊竹吾妻太夫	竹沢弥十郎
	青海山	矢口渡し	片岡市太郎	大沢重一	鶴澤小芝
昭和 27 年	猩々丸	牡丹景清	嵐 冠十郎	豊竹吾妻太夫	鶴澤小芝
	壽山	熊谷陣屋	三桝源九郎	豊竹美玉太夫	伊吹甚造
	鳳凰山	忠臣蔵七段目	片岡市太郎	宮川常盤太夫	鶴澤梅玉（安造）
昭和 28 年	翁山	源平咲分牡丹	富士松山鳥	豊竹吾妻太夫	広瀬包
	萬歳樓	伽羅先代萩	三桝源九郎	新木好ゞ	鶴澤小芝
	常磐山	吃又	片岡市太郎	豊竹美玉太夫	伊吹甚造
昭和 29 年	月宮殿	南部坂雪の別れ	片岡市太郎	豊竹常盤太夫	鶴澤小芝
	諫鼓山	鏡山	富士松山鳥	竹本玉声	広瀬包
	青海山	寺子屋	嵐 冠十郎	豊竹美玉太夫	伊吹甚造
昭和 30 年	孔雀山	盛綱陣屋	嵐 冠十郎	新木好ゞ	竹沢弥十郎
	猩々丸	熊谷陣屋	市川市左衛門	豊竹吾妻太夫	鶴澤美昇
	壽山	重の井子別れ	吉田久登	豊竹志賀太夫	伊吹甚造
	鳳凰山	松王下屋敷	市川蝶昇	豊竹美玉太夫	鶴澤小芝
昭和 31 年	春日山	曾我物語 中村住家の段	市川延一郎	竹本品太夫	竹本竹司
	高砂山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	松本麗蝶	豊竹美玉太夫	鶴澤小芝
	常磐山	安達原袖萩祭文	小山左馬蔵	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
	翁山	鎌倉三代記	沢村納茂丸	豊竹吾妻太夫	鶴澤美昇
	萬歳樓	弁慶上使	市川市左衛門	新木好ゞ	竹沢弥十郎
昭和 32 年	青海山	安達原安方住家の段	小山左馬蔵	豊竹美玉太夫	鶴澤甚造
	猩々丸	日向島娘景清	松本麗蝶	豊竹吾妻太夫	鶴澤美昇
	月宮殿	松王下屋敷	市川延一郎	豊竹浪登太夫	竹本竹司
	諫鼓山	熊谷陣屋	横田文三郎	豊竹志賀太夫	鶴澤弥十郎
昭和 33 年	鳳凰山	基盤太平記	大谷廣右衛門	豊竹常盤太夫	鶴澤美昇
	春日山	近江源氏先陣館	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	壽山	神霊矢口渡し	松本麗蝶	豊竹美玉太夫	伊吹甚造
昭和 34 年	翁山	千本桜 道行・法眼館	大谷廣右衛門	豊竹吾妻太夫	竹沢弥十郎
	常磐山	平右衛門物語の段	小山左馬蔵	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
	孔雀山	太功記十段目	市川延二郎	竹本双巴太夫	鶴澤美昇
	高砂山	寺子屋	松本麗蝶	豊竹美玉太夫	竹本品太夫
	萬歳樓	本蔵下屋敷	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
昭和 35 年	青海山	鏡山 長局の段	小山左馬蔵	豊竹美玉太夫	鶴澤甚造
	春日山	熊谷陣屋	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	月宮殿	鳴戸	松本麗蝶	豊竹吾妻太夫	鶴澤品太夫
	諫鼓山	扇屋熊谷 上総家の段	大谷廣右衛門	豊竹常盤太夫	鶴澤美昇

外題・三役一覧（昭和 25 年～平成 23 年）（塗りつぶしは三役修業塾生・下線は元塾生で現在はプロ）

昭和 36 年	猩々丸	鬼一法眼 大蔵卿	小山左馬蔵	豊竹吾妻太夫	竹沢弥十郎
	鳳凰山	義士外伝 潮田又之丞	市川延二郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	高砂山	宮守酒 監物館の段	大谷廣右衛門	豊竹常盤太夫	鶴澤美昇
	壽山	お染久松 野崎村の段	松本麗蝶	豊竹美玉太夫	鶴澤甚造
昭和 37 年	常磐山	神霊矢口渡 頓兵衛住家	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
	翁山	葛の葉の子別れ	大谷廣右衛門	豊竹吾妻太夫	鶴澤弥十郎
	萬歳樓	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	孔雀山	曾我物語 中村住家の段	市川延二郎	竹本品太夫	鶴澤美昇
昭和 38 年	諫鼓山	義経千本桜 道行より河連法眼館	大谷廣右衛門	豊竹豊太夫	鶴澤のし太郎
	青海山	安達原袖萩祭文	小山左馬蔵	豊竹美玉太夫	鶴澤甚造
	月宮殿	摂州合邦の辻	松本麗蝶	竹本品太夫	鶴澤美昇
	春日山	箱根霊験記 滝の湯	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
昭和 39 年	鳳凰山	太功記十段目 尼が崎	市川延二郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	高砂山	川中島 輝虎配膳	中村幹三郎	竹本豊太夫	鶴澤のし太郎
	猩々丸	老後の政岡	小山左馬蔵	豊竹吾妻太夫	豊澤越雄
	壽山	梅川忠兵衛	松本麗蝶	竹本品太夫	鶴澤美昇
昭和 40 年	萬歳樓	重の井子別れ	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	常磐山	寺子屋	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
	翁山	安達原 袖萩祭文	小山左馬蔵	竹本豊太夫	豊澤越雄
	孔雀山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川延次郎	竹本品太夫	鶴澤美昇
昭和 41 年	春日山	太功記十段目 尼が崎	市川延一郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	青海山	神霊矢口渡 頓兵衛住家	徳田久昇	中井清太郎	鶴澤甚造
	諫鼓山	曾我物語 中村禅師坊	市川延次郎	豊竹常盤太夫	竹本竹司
	月宮殿	義士伝 赤垣源蔵出立	松本麗蝶	竹本品太夫	鶴澤美昇
昭和 42 年	鳳凰山	熊谷陣屋	市川延次郎	竹本亀太夫	鶴澤文童
	高砂山	景清島物語	中村幹三郎	竹本豊太夫	豊澤越雄
	壽山	佐倉宗五郎 子別れ	松本麗蝶	竹本志賀太夫	鶴澤美昇
	猩々丸	鏡山 長局の段	徳田久昇	中井清太郎	鶴澤甚造
昭和 43 年	萬歳樓	源平咲分牡丹 重忠館	中村幹三郎	竹本豊太夫	豊澤越雄
	翁山	男の花道	関三右衛門	中井清太郎	鶴澤文童
	孔雀山	源平布引滝 綿繰馬	市川眼笑	竹本亀太夫	鶴澤一栄
	常磐山	弁慶上使の段	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
昭和 44 年	春日山	義経千本桜 道行	関三右衛門	竹本亀太夫	鶴澤文童
	青海山	重の井子別れ	森下操	中井清太郎	鶴澤甚造
	月宮殿	太功記十段目 尼が崎	松本麗蝶	竹本品太夫	鶴澤美昇
	諫鼓山	義士外伝 潮田又之丞	市川延次郎	竹本竹司太夫	豊澤団昇
昭和 45 年	鳳凰山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川延次郎	竹本志賀太夫	豊澤団昇
	高砂山	弥次喜多道中記 赤坂並木	関三右衛門	竹本豊太夫	鶴澤文童
	壽山	鳴門	松本麗蝶	竹本品太夫	鶴澤美昇
昭和 46 年	孔雀山	お祭り	伊東伊三志郎		
	常磐山	曾我夜桜揚屋の段 助六	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	鶴澤甚造
	萬歳樓	弁慶上使の段	中村幹三郎	竹本豊太夫	野沢芳三郎
	翁山	碁盤太平記 山科閑居	関三右衛門	竹本辰美太夫	豊澤重松

昭和 47 年	青海山	源平咲分牡丹 重忠館	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	諫鼓山	石切梶原	市川眼笑	竹本亀太夫	野沢芳三郎
	月宮殿	神靈矢口渡 頓兵衛住家	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	豊澤団昇
	春日山	鎌倉三代記 誉れ出陣	関三右衛門	竹本辰美太夫	鶴澤富二郎
昭和 48 年	鳳凰山	二十四孝 謙信館	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
	高砂山	重の井子別れ	市川眼笑	竹本豊太夫	鶴澤門三郎
	猩々丸	忠臣蔵十段目 南部坂	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	壽山	彦山権現 六助住家	松本麗蝶	豊竹常盤太夫	豊澤団昇
昭和 49 年	萬歳樓	日向島娘景清 子別れ	中村幹三郎	竹本豊太夫	鶴澤門三郎
	翁山	伽羅先代萩	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
	常磐山	太功記十段目 尼が崎	松本麗蝶	竹本米太夫	豊澤団昇
昭和 50 年	月宮殿	忠臣蔵七段目 一力茶屋	松本麗蝶	竹本豊太夫	豊澤団昇
	青海山	南部坂雪の別れ	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	諫鼓山	ひらがな盛衰記 源太勘当	市川眼笑	竹本呼栄太夫	鶴澤紋三郎
	翁山	安珍清姫 日高川	中村芝蝶	竹本米太夫	豊澤仙右衛門
昭和 51 年	高砂山	熊谷陣屋	市川延次郎	竹本豊太夫	鶴澤友太郎
	壽山	義経千本桜 吉野山道行	松本麗蝶	竹本い太夫	豊澤団昇
	鳳凰山	川中島 輝虎配膳・橋弁慶	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
	猩々丸	神靈矢口渡 頓兵衛住家	森下操	中井清太郎	谷口松栄
昭和 52 年	孔雀山	重の井子別れ	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	常磐山	日向島 娘景清	松本麗蝶	竹本い太夫	豊澤団昇
	翁山	阿波の鳴門	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
	萬歳樓	曾我物語 中村禅師坊	市川延次郎	竹本豊太夫	鶴澤友太郎
昭和 53 年	青海山	鏡山	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	春日山	太功記十段目 尼が崎	松本扇雀	豊竹常盤太夫	豊澤仙右衛門
	月宮殿	義士太鼓討入	松本麗蝶	竹本い太夫	豊澤団昇
	諫鼓山	雪曙小和田関所	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
昭和 54 年	猩々丸	太功記十段目	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	高砂山	義士外伝 潮田又之丞	市川延次郎	竹本紀六太夫	鶴澤友太郎
	壽山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	松本麗蝶	竹本い太夫	鶴澤門三郎
	鳳凰山	神靈矢口渡	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤仙右衛門
昭和 55 年	常磐山	新口村	松本麗蝶	竹本い太夫	豊澤玉次
	孔雀山	牡丹景清	森下操	中井清太郎	谷口松栄
	萬歳樓	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川延次郎	竹本紀六太夫	鶴澤友太郎
	翁山	弁慶上使	中村芝蝶	竹本辰美太夫	豊澤重松
昭和 56 年	春日山	熊谷陣屋	市川延次郎	竹本紀六太夫	鶴澤友太郎
	月宮殿	お染久松 野崎村	松本麗蝶	竹本い太夫	鶴澤門三郎
	諫鼓山	扇屋熊谷	中村芝蝶	竹本辰美太夫	鶴澤泰二郎
	青海山	太功記十段目 尼が崎	森下操	中井清太郎	谷口松栄
昭和 57 年	鳳凰山	釣女	中村芝蝶	竹本泉太夫	鶴澤泰二郎
	猩々丸	弁慶上使	森下操	中井清太郎	片桐勘一
	壽山	曾我 中村閑居	松本麗蝶	竹本い太夫	鶴澤門三郎
	高砂山	牡丹景清	市川延次郎	竹本紀六太夫	野沢賢治

昭和 58 年	翁山	火の見櫓お七	中村芝蝶	竹本秀太夫	豊澤賢治
	萬歳樓	太功記 出世の礎	水口一夫	竹本綿昇	豊澤仙右衛門
	孔雀山	神霊矢口渡 頓兵衛住家	市川升十郎	竹本文太夫	鶴澤扇玉
	常磐山	鳴神	中村芳三郎	竹本い太夫	豊澤玉次
昭和 59 年	諫鼓山	京人形	中村芝蝶	竹本秀太夫	豊澤賢治
	青海山	重の井子別れ	市川升十郎	竹本文太夫	鶴澤扇玉
	春日山	太功記十段目 尼が崎	市川延次郎	竹本紀六太夫	竹沢三登
	月宮殿	安達ヶ原 袖萩祭文	松本麗蝶	竹本い太夫	豊澤玉次
昭和 60 年	高砂山	熊谷陣屋	市川延次郎	竹本紀六太夫	豊澤玉次
	壽山	蜘蛛絲梓弓	水口一夫	竹本朋太夫	豊澤和雄
	鳳凰山	お染久松 質屋	中村芝蝶	竹本秀太夫	豊澤賢治
	猩々丸	義経千本桜 吉野山道行	市川升十郎	竹本文太夫	鶴澤扇玉
昭和 61 年	翁山	一条大蔵卿	中村芝蝶	竹本秀太夫	豊澤重松
	常磐山	奥州白石噺 揚屋の場	柳原照子	竹本紀六太夫	豊澤玉次
	孔雀山	弁慶上使	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	萬歳樓	日本振袖始 簀の川川上	水口一夫	竹本幹太夫	野沢賢治
昭和 62 年	月宮殿	熊谷陣屋	松本麗蝶	竹本紀六太夫	豊澤玉次
	春日山	義経千本桜 吉野山道行	嵐 歌雀	野沢吉哉	野沢吉哉
	諫鼓山	宮守酒	中村芝蝶	竹本秀太夫	豊澤賢治
	青海山	勸進帳 安宅関	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
昭和 63 年	猩々丸	鏡山	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	鳳凰山	弁慶上使	中村芝蝶	竹本団力	豊澤賢治
	高砂山	曾我 中村閑居	市川延次郎	竹本紀六太夫	豊澤玉次
	壽山	身替座禅	水口一夫	竹本幹太夫	豊竹長二
平成元年	常磐山	義経千本桜 吉野山道行	沢村曙當	竹本旭太夫	豊澤玉次
	翁山	重の井子別れ	中村芝蝶	竹本団力	豊澤賢治
	孔雀山	一条大蔵卿	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	萬歳樓	棒しばり	茂山千五郎		
平成 2 年	青海山	吉田社頭車曳きの場	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	諫鼓山	奥州白石噺 揚屋の場	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
	春日山	平成寿の舞	中村和歌若	野沢吉哉	野沢吉哉
	月宮殿	新口村	松本麗蝶	竹本秀太夫	豊澤玉次
平成 3 年	鳳凰山	義経千本桜 吉野山道行	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
	壽山	封印切り	水口一夫	芳村伊十佐久	杵屋栄一郎
	猩々丸	源平咲分牡丹	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	高砂山	寺子屋	市川延次郎	竹本司太夫	豊澤玉次
平成 4 年	翁山	朝顔日記 宿屋・大井川	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
	常磐山	二十四孝 十種香・狐火	沢村曙當	竹本巽太夫	豊澤玉次
	孔雀山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	萬歳樓	弁慶上使	市川団四郎	竹本艶太夫	野沢賢治

平成 5 年	青海山	神霊矢口渡 頼兵衛住家	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	月宮殿	義経千本桜 吉野山道行	沢村曙當	竹本美功	豊澤玉次
	春日山	熊谷後日物語	市川団四郎	竹本艶太夫	野沢賢治
	諫鼓山	妹背山 姫戻り・竹雀	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
平成 6 年	高砂山	心中宵庚申 八百屋の段	沢村曙當	竹本美功	豊澤玉次
	壽山	新口村	水口一夫	竹本清人	豊竹長二
	鳳凰山	吾妻与五郎根引門松	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
	猩々丸	伽羅先代萩 御殿	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
平成 7 年	常磐山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
	翁山	中将姫古跡松 雪責め	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
	孔雀山	葛の葉後日譚	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	萬歳樓	太功記十段目 尼が崎	市川団四郎	大家千永	西邑龍晃
平成 8 年	月宮殿	恋女房染分手綱 子別れ	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
	春日山	義経千本桜 川連法眼館	市川団四郎	竹本清人	豊澤浩樹
	青海山	源平咲分牡丹畠 重忠館	市川升十郎	竹本団勇	鶴澤扇玉
	諫鼓山	お染半九郎 鳥辺山心中	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
平成 9 年	猩々丸	新平家物語 重盛諫言	大谷白菊	竹本団勇	鶴澤扇玉
	高砂山	鏡山旧錦絵	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
	鳳凰山	石切梶原 星合寺	市川団四郎	西邑粹龍	下村賀祝
	壽山	葛の葉子別れ・草の別れ	水口一夫	出月清人	豊澤浩樹
平成 10 年	孔雀山	忠臣蔵七段目 一力茶屋	市川松尾	竹本団勇	鶴澤扇玉
	萬歳樓	安珍清姫 日高川	市川団四郎	出月清人	野沢賢二
	常磐山	安達ヶ原三段目 袖萩祭文	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
	翁山	釣女戎詣恋釣針	中村芝蝶	竹本団力	豊澤重松
平成 11 年	月宮殿	曾我月桜揚巻助六	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
	諫鼓山	彦山権現誓助剱 毛谷村	水口一夫	竹本団力	豊澤重松
	青海山	恋女房染分手綱 子別れ	市川松尾	竹本団勇	鶴澤扇玉
	春日山	傾城阿波鳴門 どんどろ	市川団四郎	出月清人	豊澤浩樹
平成 12 年	壽山	傾城阿波鳴門 どんどろ	水口一夫	出月清人	豊澤浩樹
	猩々丸	八陣守護城 湖水御座船	市川松尾	竹本団勇	鶴澤扇玉
	鳳凰山	義士外伝 土屋主税	市川団四郎	竹本龍一	豊澤賀祝
	高砂山	鬼一法眼三略巻 大蔵卿	中村竹昇	竹本美功	豊澤玉次
平成 13 年	常磐山	忠臣蔵七段目 道行	中村玉次	竹本美功	豊澤玉次
	萬歳樓	碁盤太平記 山科閑居	市川団四郎	竹本清人	豊澤浩樹
	孔雀山	新版歌祭文 野崎村	市川松尾	竹本団勇	鶴澤扇玉
	翁山	神霊矢口渡 頼兵衛住家	中村福太郎	竹本団力	豊澤賀祝
平成 14 年	青海山	鏡山旧錦絵 草履打ちより 奥庭仕返しまで	市川松尾	竹本団勇	豊澤賀祝
	春日山	戻り橋 三幕	市川団四郎	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
	月宮殿	御所桜堀川夜討 弁慶上使の段	中村福太郎	竹本美功	豊澤玉次
	諫鼓山	傾城反魂香 土佐将監閑居の場	水口一夫	竹本朋太夫	豊澤勝二郎

平成 15 年	猩々丸	絵本太功記 十段目 尼崎閑居の場	市川松尾	竹本団勇	豊澤龍三
	壽山	新版歌祭文 野崎村	水口一夫	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹・豊澤岬輔
	鳳凰山	菅原伝授手習鑑 寺子屋	川村和彦	竹本龍豊	豊澤賀祝
	高砂山	一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段	市川団四郎	竹本美功	野沢賢治
平成 16 年	孔雀山	恋女房 染分手綱 重の井子別れの段	市川松尾	竹本団勇	豊澤龍三
	翁山	平家女護島 俊寛 鬼界ヶ島の間	中村福太郎	竹本龍豊	豊澤賀祝
	常磐山	伽羅先代萩 足利家御殿の間	嵐徳江	竹本千永	野沢賢治
	萬歳樓	恋飛脚 大和往来 封印切	市川団四郎	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
平成 17 年	青海山	御所桜堀川夜討 弁慶上使	市川松尾	竹本団勇	豊澤賀祝
	諫鼓山	妹背山婦女庭訓 三笠山御殿の間	水口一夫	竹本朋太夫	豊澤勝二郎
	春日山	義経千本桜 道行の間	市川団四郎	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
	月宮殿	信州川中島合戦 輝虎配膳の間	中村福太郎	竹本美功	野沢賢治
平成 18 年	壽山	身替座禅	水口一夫	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
	猩々丸	神霊矢口渡 頼兵衛住家の場	市川松尾	竹本団勇	豊澤龍三
	高砂山	源平魁鬨 扇屋熊谷 扇屋より五條橋まで	市川団四郎	竹本美功	野沢賢治
	鳳凰山	鬼一法眼三略巻 菊畑	川村和彦	竹本龍豊	豊澤賀祝
平成 19 年	翁山	絵本太功記 十段目 尼崎閑居の場	中村福太郎	竹本龍豊	豊澤賀祝
	常磐山	一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段	中村まつ葉	竹本美功	野沢賢治
	萬歳樓	仮名手本忠臣蔵七段目 一力茶屋の間	市川団四郎	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
	孔雀山	伽羅先代萩 足利家御殿の間	市川松尾	竹本団勇	鶴澤扇玉
平成 20 年	青海山	鬼一法眼三略巻 菊畑	市川松尾	竹本団勇	豊澤賀祝
	月宮殿	碁太平記白石噺 新吉原 揚屋	中村福太郎	竹本美功太夫	野沢賢治
	諫鼓山	京人形左彫	水口一夫	竹本朋太夫	豊澤勝二郎
	春日山	義経千本桜 河連法眼館の間	市川団四郎	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
平成 21 年	鳳凰山	鬼一法眼三略巻 一條大蔵譚	川村和彦	竹本龍豊	豊澤賀祝
	高砂山	蝶千鳥曾我兄弟 中村閑居の間	市川団四郎	竹本美功	野沢賢治
	猩々丸	八陣守護城 湖水御座船の間	市川松尾	竹本団勇	豊澤龍三
	壽山	義経千本桜 吉野山	水口一夫	竹本弥汐太夫	豊澤浩樹
平成 22 年	翁山	双蝶々曲輪日記 八幡の里 引窓の間	岩井小紫	竹本甚太夫	豊澤賀祝
	常磐山	天満宮菜種御供 時平の七笑	嵐 孝宏	竹本龍一	豊澤翁賀
	萬歳樓	男の花道	市川団四郎	竹本三枘太夫	豊澤浩樹
	孔雀山	仮名手本忠臣蔵七段目 一力茶屋の間	千川貴楽	竹本団勇	豊澤龍三
平成 23 年	春日山	釣女	藤間勘輝	竹本弥清	豊澤浩樹
	月宮殿	姫山姥	岩井小紫	竹本美功太夫	豊澤清次郎
	青海山	玉藻前囃袂 道春館の間	川村和彦	竹本団勇	豊澤賀祝
	諫鼓山	春重四海波	水口一夫	竹本朋太夫	豊澤勝二郎

第五項 衣装屋・鬘屋・顔師・小道具屋の決め方

平成二三年出番山のうち青海山を除く春日山・月宮殿・諫鼓山は同じ衣装屋・鬘屋である。顔師も京都の顔師を中心としたチームが春日山・月宮殿・諫鼓山を担当している。多くは山組が衣装屋と契約すると、衣装屋が鬘屋と顔師を揃えてチームで長浜曳山祭に来る。

春日山・月宮殿・諫鼓山に来る衣装屋・鬘屋・顔師は、もともと振付の水口一夫氏が紹介した業者である。

衣装屋は振付の意向が反映されやすく、春日山は今回振付がかわったことにより、衣装屋もかわった。

【春日山（本町組）】

衣装屋・鬘屋の決定 平成二三年から振付がかわったので、鬘屋・衣装屋もかわったが、以前は両方とも同じ業者だった。以前の鬘は重いし頭に合わないので痛かった。子どもが痛がるので出番以外は外しておくこともあった。今の業者は頭にしっかり合わせて作るの
で痛くない。

衣装屋 平成二三年から埼玉の会社がする。それ以前は福井の会社だった。振付によって衣装屋は決まる。今回の衣装屋はほかの山組には何年もかわっている。チーフが諫鼓山に入っており、月宮殿にもいる。衣装屋は衣装製作と着付けを担当する。山組から衣装屋のチーフに依頼がきて、鬘屋と顔師とチームを組んでくる。

外題によって衣装は決まっている。柄が決まっているので、歌舞伎などでもちいられるもとの衣装を子ども用に作り直す。あとは価格の問題になる。

衣装は本番用のみを持つてくる。稽古用は山組が用意する。狂言の途中で直せるよう着付けの仕方を舞台後見に教えている。

衣装がずれたらすぐに直せるように、演目を見ながら待機している。曳山には上がれないので舞台裾から直す。

鬘屋 京都の会社。水口氏が埼玉の衣装屋に紹介して、そこが春日山に連れていった。この鬘屋は、普段京都の芸妓さんや大阪の松尾塾子供歌舞伎の仕事などを手掛けている。今回は諫鼓山と春日山・月宮殿の仕事を受けている。長浜は三回目である。去年は翁山に入ったが、振付から細かい指示があった。

前年の一二月頃に外題を聞いて、準備をした。鬘合わせには上司が来た。そのあとは任されるので現場で何とかする。春日山には二人で入っているので相談や手伝いができる。

鬘と化粧 鬘と肌は、こめかみや額の部分の色を顔師の人と相談して合わせる。

鬘と衣装 襟首の上げ加減や襟の空け加減などを、衣装屋と相談する。鬘と襟首の兼ね合いが大切である。

顔師 師匠が月宮殿に入っており、その指示で来た。歌舞伎定型の化粧をする。振付からの指示に従う。

【月宮殿（田町組）】

鬘屋 京都・祇園の鬘屋。

衣装屋 衣装は埼玉の衣装屋。子ども用のブツカケ（ブツカエシ）は、どこの衣装屋にもない。今回のブツカケは、染めも柄も大歌舞伎と同じものである。ほとんどが大歌舞伎と同じものを作っている。平

成二三年の外題「姫山姥」の柄は紙子の衣装も最後のブツカケも柄が決まっていた、そのままの柄を使った。正絹を使っている。遠くから見ても、あつ、と思わせるものを使っている。

榊持・御幣持・小舞台の衣装に関してのみ、神職や僧職の衣装などの大手である京都の衣装屋で調達している。

小舞台の衣装の注文先 小舞台の衣装は毎回同じものを使うが、袴・袴が老朽化したので平成二三年に新調した。

小道具の作成者 三味線の豊澤清次郎氏が作成した。四月一六日におこなう長浜文化芸術会館の観劇会で場面転換に使う壁も清次郎氏が作成した。

顔師 奥山恵介氏。かつて東映の映画俳優だった。人形師でもある。振付の水口氏と四谷怪談や雨月物語の人形芝居をしていた。人形座（ひとがたぎ）を結成し、三年ほど活動した。祇園祭の化粧もしている。

【青海山（北町組）】

衣装屋 愛知県の衣装屋。スタッフは、昭和五八年〜平成八年に振付に来ていた市川升十郎氏が結成した「市川少女歌舞伎」の役者たちである。子どもの頃から舞台上がっていたが、年齢を理由に引退し、現在の会社を立ち上げた。米原・揖斐川・石川の小松・豊橋・静岡の湖西などの子ども歌舞伎を手掛けている。

【諫鼓山（御堂前組）】

衣装屋 埼玉の衣装屋のチーフは、東京松竹の大歌舞伎の衣装係に勤めていた。松竹の衣装係だったときから振付の水口氏と知り合いである。昭和六三年に水口氏が壽山で「身替座禪」を上演したときに、

協力したのが、長浜と関係を持った最初だった。その後、東京の会社を辞めてほかの所に勤め始めていたところ、水口氏から衣装屋をしないかとすすめられ、衣装屋を始めた。水口氏に祇園の鬘屋を紹介され、現在、その鬘屋と長浜に来ている。

衣装へのこだわり 衣装屋のチーフは三五年間歌舞伎の世界にいた。彼は歌舞伎といえないものにしたくないと考えている。子ども相手でも本物の歌舞伎とかわらないものを特注で作っている。かつての曳山祭の衣装は、金ぴかだが布はヒラヒラだった。素人の目にはよいように見えるが、見る人が見ればよくないとすぐにわかるものだった。自分の手掛けたものは織りも染めもよい本物の衣装で、見る人が見ればよい着物とわかるという。

水口氏によると、埼玉の衣装屋が作る衣装は江戸好みで粋なものが多いという。関西は少し野暮ったくてもよいという。埼玉の衣装屋は、歌舞伎が好きで、子どもが好きだから採算度外視で作っている。正絹でよい染めをしているのは、どうせ作るならよいもので、ここだわっているからである。

よその子ども歌舞伎との関係 垂井曳山祭りでは一つの山組だけ担当している。また、青海山の振付の川村和彦氏が米原曳山祭でも振付をしているため、平成二三年から米原で、川村氏が振付をしている山組の衣装を担当するようになった。川村氏とは川村氏が学生のときに松竹に勉強に来ていた頃からの知り合いである。川村氏は大学で歌舞伎研究会に所属していたので、松竹に衣装を借りにきていた。

衣装屋が担当している長浜の山組 染めがよく、正絹を使っているためほかの山組には値段が高いと思われるが、意外に安いこと

が知られてほかの山組からも引き手が来た。現在は、一二の山組のうち九の山組を手がけている。毎年三つの山組を担当している。

京都の鬘屋 振付の水口氏が京都の鬘屋を長浜に引っ張ってきた。値段は少し高いが、一人ずつに合わせて作るため子どもが鬘を痛がつて泣いたりすることはなくなった。

顔師 京都で祇園祭の稚児の化粧などをしている顔師のS氏が担当している。S氏は八年前から来ている。平成三年は月宮殿・春日山・諫鼓山に弟子が行っている。

S氏が、弟子や知り合いを連れてきてチームを作る。月宮殿で化粧をしている奥山氏が親方だが、仕切っているのはS氏である。

顔師は、普段舞踊家の化粧をする。プロの役者は自分で塗るが、舞踊家などは顔師を頼む。

化粧は、かつて振付がしていた。水口氏も化粧ができるので、長浜に来て二、三年は自分で塗っていたが、朝渡りのときなどは朝が早く負担が大きいため、専門の顔師を頼むようになった。

子どもの顔の化粧 人の顔を作るのは難しいが、とくに子どもの顔は小さいため、バランスをとるのが難しい。

衣装屋・鬘屋・顔師の依頼の仕方 それぞれ別の会社。以前は別々に頼んでいたが、今は埼玉の衣装屋に頼むと、化粧屋と鬘屋を揃える。

小道具屋 小道具屋は衣装屋とは別に頼む。浅草の小道具屋は歌舞伎の小道具を扱っている。大阪には松竹の衣装の小道具部がある。平成三年の諫鼓山の小道具は月宮殿の三味線の豊澤清次郎氏に頼んだ。清次郎氏は器用なので、手作りですぐに作ってしまう。今回の袋竹刀などは手作り。大人用のものに比べると少し太い。小道具は、

子どもの寸法なので、普通の小道具屋には置いていない。基本的にレンタルなので、祭りが終わると返却する。

第六項 稽古までの行事

長浜曳山祭の準備が本格的に動き出すのは、初集会といわれる山組集会が開かれる十一月一日以降である。ここでは十一月一日から狂言の稽古が始まるまでの行事を見ていく。主な行事は役者依頼・役者決め・衣装および鬘合わせ・稽古場設営・總當番および各山組でおこなわれる集会である。長濱八幡宮参拝をおこなう山組もある。なお、各山組でおこなわれる行事の日程は、毎回変動する。

(1) 役者依頼

一月下旬から二月上旬にかけて各山組は役者依頼をする。各役者の家に行き、役者親に依頼する。承諾されて初めて役者が決定する。調査をおこなった春日山と月宮殿では役者依頼は若い衆がおこなう。

【春日山（本町組）】

平成三年二月一日に役者依頼をした。春日山ではキメザケ（喜芽酒）という。負担人、筆頭をはじめ若い衆役員が扇子を片手に、各役者宅へキメザケに赴く。ここで正式に役者と決定する。

九時二〇分若い衆の役員が春日会館に集まる。若い衆の服装は私服だが派手な羽織を着ている。九時半に役員五人が揃う。全員緊張した面持ち。各役者の家で見てもらうDVDは振付を通じて借りた岐阜県関市で演じられた「釣女」である。

九時五七分春日会館を出発し、町内の役者の家に行った。家に入る

ときは酒を差し上げる。二軒まわり、長浜市相撲（旧長浜市）の新興住宅地に行った。そこでも二軒訪れた。各家三〇分程かった。家の主人は背広を着ていた。子どもは平服であった。若い衆にお土産を渡す家もあった。なお、相撲町の二軒とも相撲町に引っ越した春日山の人である。一二時過ぎにキメザケが終わり、会館で食事をして終わった。

【月宮殿（田町組）】

平成二三年一月二二日の一九時から始まった。筆頭宅で外題・役者・御幣持・榊持が筆頭から発表される。その後、若い衆が二、三人ずつ四班に分かれて役者依頼に向かう。役者依頼の各行程には決められた口上がある。

役者依頼では、まず若い衆が玄関先で依頼の口上を述べる。そして役者親が依頼を承諾すると、座敷に上がり若い衆と役者親が食事をす。このとき、子どもの情報を記載する書類や、役者親へのお知らせの書類を役者親に渡す。

役者依頼から戻ると若い衆筆頭に報告する。役者依頼が済むと筆頭宅で食事をする。

調査日		時間		内容	
平成二三年一月二二日					
場所		月宮殿筆頭宅			
19:07		19:09		19:11	
副筆頭（行事進行）の司会により開会 出席者二人。そのうち奥に筆頭一人（真ん中）・行事進行一人（向かって左・相談役一人（向かって右）。副筆頭による司会で開始。 配布資料・扇子・各家に渡す書類「平成二三年度月宮殿役者登録カード」 「役者親の皆様へ『役者親顔合わせ』のお知らせ」、そして挨拶の口上を記した「役者頼み挨拶例」は役員が揃う前に各席に用意してある。		外題・役者・御幣持・榊持を筆頭が発表し拍手で承認される。		役者依頼担当の発表 役員二、三人ずつがそれぞれ役者・御幣持・榊持に依頼に行く家を発表。四班に分かれ、二、三軒の家に依頼する。都合が悪いお宅は後日三役より依頼する旨を連絡。 役者配役・衣装合わせが二月一三日から二七日に変更の旨を連絡。	
19:13				各班に分かれて打合せ 初めて役員になる人は、口上の仕方など経験者に聞くことを、行事進行が確認。	

役者依頼参与観察表（月宮殿）

20:55	19:50	19:20
酒宴 半分くらいの班が戻ってきたら酒宴の準備を開始。	若い衆戻って報告 一軒ずつ終わり次第、それぞれが筆頭に報告の口上。 なお「役者頼み挨拶例」にある筆頭への報告の口上どおり、扇子を前に置いて挨拶をしなかったり、きちんと口上がいえなかったりした若い衆は、注意されてもう一度やり直していた。そしてまた次の家に役者依頼へ。	若い衆役者依頼へ出発 役員が月宮殿と記された提灯、それに役者を出す家に送る扇子とはちまき、保険証のコピーを貼り付けてもらいう書類を持って、次々に役者依頼へ。役員がそれぞれ役者依頼に出ていくときの挨拶「〇〇様、××様宅へ行って参ります」、筆頭「よろしくお願いします」。 各班、提灯に灯りをともし出発。筆頭は待機する。 役者依頼 役員が依頼先の玄関先で口上を述べ、役者親が依頼を承諾する。その後座敷で役者親と飲食をし挨拶をして退出。

以下に、配布資料の文面を掲載する。

配布書類「平成二三年度月宮殿役者登録カード」

氏名、住所、電話番号・緊急時携帯番号、身長・体重・血液型、足のサイズ、生年月日・年齢、通っている小学校・学年・クラス・担任教師、お子さんの健康上の留意事項（食物アレルギー等）、インフルエンザ予防接種の有無と接種日、保険証のコピー。

棒線部は、学校側に対して子どもがこの祭に参加するために、早退などを行うことをあらかじめ連絡するために必要。学校側も祭の

ことは認識している。

配布書類「役者親の皆様へ『役者親顔合わせ』のお知らせ」

承諾へのお礼とご協力をお願い。そして二月一二日午後七時より田町会館で行われる顔合わせへの参加依頼。服装は平服で、「役者カード」に必要な事項を書いて持参するように依頼。

そこでの議題としては、「役者親代表の選出」「今後の日程についての連絡、相談」「（若い衆接待及び裸参り振る舞い：未定）について」の三点。

また当日にパンフレットに掲載させていただく写真の撮影を行うため、お子様とご一緒にご参加ください。

当日に欠席する場合は、役者カードを事前に行事進行に提出すること。

二月二七日（日）に「振付との初顔合わせ・役決め・衣装かつら合わせ」が決定していて、この行事については日程を変更することができないため、「役者・小舞台の方は、必ずご参加をよろしくお願いします」。

配布資料「役者頼み挨拶例」

①玄関先に馬上提灯をおき、火を消す。

②中に入り向かい合って挨拶をする。

◎扇子を前に置き

「本日は、筆頭の命をうけお伺いさせていただきました。先ほどの役員会におきまして、全体の総意をもちまして、平成二三年度の春季祭礼に〇〇さんのご子息の〇〇君が（役者・御幣持・榊持）に推挙されましたことをご報告申し上げます。快くお引き受けくださいま

すようよろしくお願い申し上げます。」

（謹んでお受けいたします。）

「ありがとうございます。その旨、筆頭のほうにご報告させていただきます。」

早速ではありますが、扇子とはちまきの方をお渡しさせていただきます。お受け取りください。また配役につきましては、振付の先生に一任させていただいておりますので、どのような役になりましたともご理解ご協力をよろしくお願い致します。」

③ 扇子を開き、はちまきと進呈用の扇子を上へのせ、向きを一八〇度かえ差し出す。

（役者親は、扇子ごと受け取り上の品をとり、扇子を閉じて向きを変え返却する。）

④ 役者カードと役者親寄りの案内のプリントを渡す。

「それでは失礼させていただきます。」

⑤ 玄関先の馬上提灯に火をつける。

⑥ 筆頭宅に戻り報告

⑦ 扇子を前において筆頭と向かい合って、挨拶をする。

「○○さん宅にお伺いし、○○くんの（役者・御幣持・櫛持）推挙の件、お願い申し上げましたところ、快くお引き受けくださいました。ご報告させていただきます。」

扇子とはちまきの意味 役者依頼をした子どもには、扇子とはちまきを役者親に渡す。祝儀のときに扇子を渡すのと同じ意味であり、子どもが若い衆入りした証でもある。



役者依頼（月宮殿）役者依頼に行く若い衆の役員による打合せ（平成23年1月22日18:52撮影）



役者依頼（月宮殿）役者に渡す扇子（平成23年1月22日18:54撮影）

(2) 役者決め・衣装および鬘合わせ

役者決めは二月上旬におこなわれる。振付が役者を見て役を当てる。調査をおこなった月宮殿と諫鼓山は振付が子どもの体格を見、いくつかの質問をして配役する。また、この日は役者親が初めて集まる日でもあるので、賄いや祝儀などの打ち合わせをする。

衣装合わせと鬘合わせは二月上旬から中旬にかけておこなう。月宮殿は役者決めと同じ日におこなう。春日山と月宮殿と諫鼓山は鬘屋と衣装屋が同じ業者のため、衣装合わせと鬘合わせの方法は同じである。

【春日山（本町組）】

平成二三年二月二〇日に衣装合わせ、鬘合わせをおこなった。

鬘の決め方 役柄で鬘は決まっているが、子どもの頭の形や大きさに合わせて形を調整する。既成のものを使うが、合わない場合にはオーダーメイドをする。人の毛を使うので、今は材料が足りず、値段が高い。鬘の長さの二倍の長さの髪が必要なので供給が不足している。人工の毛は熱に弱いので、コテを当てることなどができない。

狂言の鬘 鬘屋によると、今回の狂言の演目は動きが激しいので、大変であるとのことである。振りや動作で鬘がはずれないか、毎回心配しながら見ている。風や熱などで鬘が悪くなるため、外で演じることでも大変である。

【月宮殿（田町組）】

平成二三年二月一日、田町会館および負担人宅で役者決めと衣装・鬘合わせをおこなった。まず、役者親・役者・若い衆が田町会館に集まり、筆頭が開会の挨拶をする。その後役者は祭りの日に販売するパンフレットに載せる写真撮影をし、役者親には副筆頭から費用負担などについての説明があった。

写真撮影が済むと、役者と筆頭らは、正負担人宅に移動し、役者決めと衣装・鬘合わせをする。役者決めは、振付の岩井氏が子どもを並べ、背格好を見たり、好きなことを尋ねてから配役する。

役者発表が終わると、振付は中老と舞台装置・太道具・小道具の打合せ、役者親との面談、鬘屋と衣装屋にそれぞれ指示をする。

この日から振付は子どもに礼儀作法の指導を始める。

調査日	場所	時間	内容
平成二三年二月一日	田町会館・負担人宅	11:50	役者親・役者がほぼ田町会館に到着 役者七人・御幣持（ゴヘイサン）一人・榊持（サカキサン）二人。役員は黒のスーツ。役者親（全員、母親）もスーツが大半。 ⑤で役員が準備。②と④で並んだ子どもたちは正座で待機。⑥で役者親たちは控える。とくに親同士の会話はなし。⑤⑥に榊持・御幣持・小舞台の衣装が箱に入れて置いてある。（図参照）
12:07			開会 子どもたち・若い衆の前に扇子が置かれる。扇子は役者依頼を受けたときにもらったもの。親や祖父のものを使う子どももいる。 筆頭挨拶。役者親代表の決定と、祭りで役者親に関する諸事項の決定をおこなうことを説明。また写真撮影のカメラマンが遅れているため、一二時半頃から役者・小舞台・御幣持・榊持・舞台後見のパンフレット用写真を撮影すること、さらに小舞台・榊持・御幣持の衣装合わせがあることも説明。
12:13			役者親の心得 本松の間（①）に役者親集合。 副筆頭が司会進行で、「役者親の心得」として役者親代表と費用負担、若い衆接待日程についての会議。⑥で、小舞台・御幣持・榊持の衣装合わせが始まる。また③で写真撮影。
12:35			役者親同士での話し合い 既に何度か経験している親三人が中心となって、副筆頭が提示した会計表を見ながら相談する。連絡先の交換もする。

衣装・鬘合わせ参与観察表（月宮殿）

13:31	13:28	13:12	13:05	13:00
振付・太道具の担当者・正副負担人と中老相談役、そして途中から正副筆頭も交えて打合せ。	舞台装置・大道具・小道具の準備について打合せ	役者・筆頭・囃子方総責など正負担人宅へ移動 子どもは役者のみ移動、御幣持・榊持は移動しない。振付による配役の決定に向かう。 役者親とそれ以外の若い衆は田町会館で役者親初寄りを継続。役者親接待の打合せ。	負担人宅で配役決めの会議開始 ⑤で正負担人が司会進行、その後ろには副負担人・中老相談役が座る。 正負担人の左側に中老、右側に役者。振付の岩井氏による役者決め、衣装合わせ・髪合わせをおこなうことを説明。	役者決め 振付と子ども七人、筆頭ほか若い衆が二階で役者決め。 振付は子どもたちに対しどんなことが好きか尋ね、子どもたちが「サツカー」「工作」などと答える様子を見る。また背格好も見る。そして役を当てる。 振付は「台詞は自分の台詞だけでなく、他人の台詞も覚えておくこと、歌のようにリズムを付けて覚えるように」と指導する。 振付はこの芝居は大芝居で立派な芝居です。泣いたり笑ったりはないけれども、立ち回り・動き・踊り・台詞もしなくてはならない芝居という。 振付は、最年長の子どもに何でも先に立って皆に手本を示すように伝える。最後に扇子を前に置いて全員にお辞儀をさせる。

15:45	14:00	13:50
あつて終了する。	頭の採寸と髪製作 京都・祇園の髪屋が一人一人頭を採寸する。頭にしっかりと髪を製作するため一人二〇分ほどかかる。女性役の髪は多くあり、どれが役に合うかを岩井氏と意見交換しながら決める。頭の大きさが合わないと言技中つらいため、この髪合わせがとても重要である。 衣装については、埼玉の衣装屋が一人一人の身長や腕の長さを採寸する。 髪屋と役者全員が正座して対面し挨拶する。髪屋からも一言激励の言葉があつて終了する。	役者親と振付による面談 振付が、個々の役と物語の説明のうえで台本をしっかりと覚えてくると、舞台方は仕事が多くなるので芝居を全部覚えてきてほしいこと、稽古には下着とタオルを準備すること、角帯を締めるとシヤキツとするので締めてほしいことを伝える。

衣装、髪を決め方

狂言は役によって衣装や髪がある程度決まっているので、それに合わせて想定されるものを、各役に対して葛箆一つくらい持参している。髪はよその子ども歌舞伎や日本舞踊でも使ったもののため、内側に以前使った人の名前が書いてある。大きさを調整したり結び直してリメイクする。それぞれの役の写真をフ

田町会館での配置図

①	②台所・ダイニング
子ども 子ども 子ども	
③	④リビング
子ども 子ども 子ども 中老 正負担人	
⑤	⑥廊下
副負担人 中老相談役 板の間	===== 玄関

負担人宅、役者発表時の配置図

本松の間	役員 役員 親 親 親	子ども 子ども ②子ども 子ども 子ども
①		
本梅の間	親 親 親 親 親	花の間 子ども ④子ども 子ども 子ども
③		
調査班 B カメラなど		
役員控室	相談役 筆頭 行事	⑥
⑤		

イルにして持参しており、それを参照しながら、役者に合わせた装飾を検討する。とくに、生え際は役柄の印象に大きくかわるので、慎重に決める。

【青海山（北町組）】

平成二三年二月二〇日一〇時から相生会議所において鬘・衣装合わせがおこなわれた。役者・役者親・副筆頭・鬘と衣装を取り扱う業者が参加する。青海山では鬘屋と衣装屋は同じ業者である。一人ずつ鬘合わせと衣装合わせをする。また、このときにパンフレットに載せる写真役者親から集める。

鬘合わせの方法 鬘を実際にかぶることで寸法を調べ、鬘師は各役者の記録を取る。

衣装合わせの方法 実際に衣装を着せて、肩から手先までの長さや身長などの寸法をメジャーで測る。

道具の用意 刀や扇子といった小道具は基本的に青海山で用意する。また腰紐を女役役者は四本、男役役者は三本、肌着は各役二本、パッチ、スポーツタオル、衣装の中に入れるタオル（男役のみ）二枚は役者の家で用意する。

衣装の製作 青海山では家にある生地などを集め衣装を作ることもある。また、米原曳山祭のものを使い回すこともある。

役者親の様子 役者親のなかには両親とも参加する家もあり、子どもの写真を撮る親も見られた。それ以外にも細かい質問や疑問などを確認し、また山組から各家に心得てほしいことを伝達する会でもある。

写真集め 役者の幼い頃の写真を集める。日常的なシーンの写真を集めている。

台本を渡すタイミング 三月一三日の青海山狂言稽古始めまで子ども役者には台詞が書かれた台本は渡さず、役者の親にのみ二部台本が渡された。

【諫鼓山（御堂前組）】

役者決めは平成二三年二月六日一四時から御堂前町家でおこなわれた。振付・役者・筆頭・副筆頭・取締（直前筆頭）ら若い衆七人・役者親が集まる。若い衆はスーツ、役者および役者親は軽装である。女性の役者親もいる。なお、当日、振付への挨拶に副負担人も来る。

役者は振付の前に並んで座り自己紹介をする。振付は子どもたちを立たせ背丈を見る。また、後ろを向かせ体つきを見る。振付が子どもに女役が嫌な子はいないか尋ねると、筆頭が「大丈夫だよな」といい聞かせる。そして、振付・筆頭・副筆頭で協議したのち配役を発表する。その後、若い衆に所属する役者親が中心となり役者親が賄いなどの相談をする。また若い衆が子どもにお菓子を配る。この日から振付は役者に挨拶の声の大きさなどの注意をする。

鬘・衣装合わせは平成二三年二月二〇日一三時から御堂前町家でおこなわれた。鬘屋は京都の業者の三人、衣装屋は埼玉の業者である。業者以外は、振付・役者・役者親・若い衆が参加する。役者はこの日のために髪を短く切ってきた。

開始前に振付は衣装屋と鬘屋に衣装と鬘のイメージの打合せをする。衣装について、これまでの山組からの要望を考慮して、派手にするよ

うしきりに要求していた。一人ずつ鬘合わせと衣装用の採寸をおこない、一時間半程度で終了した。

鬘合わせの方法 銅製の型枠を木槌で叩いて大きさを調整する。型枠の大きさが決まったら、毛をつけ始める。

衣装合わせの手順 ズボンや上着を脱がせる。薄手の青いタオルを腰に巻き、細い帯で縛る。それから襦袢を羽織って帯で縛る。さらに上から本番のイメージに近い仮の衣装を着せて採寸する。一人一〇分弱で終わる。

若い衆の動き 若い衆はとくに口出しせず、横で付き添う。

振付の指示 こまめに子どもに「足を崩していいよ」「退屈？」など声をかける。時々衣装屋と柄や色のイメージを確認する。また、衣装屋に対して、「派手め綺麗なヤマの芸」、「派手にしてや、ヤマの芸だから。（山組は）派手好きやから」、「純世話物やない」など要求する。振付が筆頭に衣装の希望を確認すると、どちらかというと派手好きですと同意する。

衣装屋と若い衆の連携 衣装屋によると、衣装をかえるには三分かかる。衣装替え自体は一分で済むが、舞台の上げ下げにそれぞれ一分かかる。今回は役者に役者係をそれぞれ三人つけたが、衣装屋は、人数よりも動線を決めることが大事だと指導する。四月一二日に一度役者係に手順を覚えてほしいと依頼する。また衣装を置く場所もかなり必要になるので、用意しておくよう筆頭に依頼する。

役者が着替える場所 本番の狂言執行中に役者が着替える所は曳山に後続して曳かれる小型の曳山であるアトヤマ（後山）で、着物を置く所は別の場所が必要である。しかし、別の車を曳山につけるに

は中老の総寄にかけて、許可を受けなければいけない。また、ブルーシートを敷いて着替える場所を作るのは、最近観光客が多いために難しい。役者が曳山から下りてくると観光客が写真を撮りにくる。**衣装屋・鬘屋・顔師の宿泊場所** 長浜市内のホテルに一二日から宿泊する。ちなみに三役も同じホテルに宿泊する。**たすき掛け指導** 衣装屋が若い衆の舞台後見に歌舞伎らしいたすき掛けの仕方を指導する。



衣装合わせ（月宮殿）御幣使・榊持の衣装合わせ（平成23年2月11日12:22撮影）



役者決め（月宮殿）筆頭が配役の発表をする（平成23年2月11日13:22撮影）



髪合わせ（諫鼓山）髪の型の大きさを叩いて調整する（平成 23 年 2 月 20 日 13:06 撮影）



役者決め（諫鼓山）子どもを立たせ体格を見る（平成 23 年 2 月 6 日 14:11 撮影）



髪合わせ（諫鼓山）振付（右）が髪の見合を確認する（平成 23 年 2 月 20 日 13:07 撮影）

(3) 稽古場設営

三月中旬に各山組の会所に稽古舞台が設置される。稽古場設営は山組の若い衆が中心となっておこなわれる。普段稽古舞台の部材は山蔵や会所に分割して収納されている。部材の組み立ては、はめ込み式やボルトでつなぐようになっていいる。

【春日山（本町組）】

平成二三年三月六日に九時から春日会館でおこなわれた。一三人の若い衆が、春日会館二階の押し入れに分割して収納されている舞台の部材を取り出し、春日会館二階の奥の部屋に組み立てる。部材にはすべて番号が振られている。一番下に土台を敷き、それに板をはめる。柱の上部は鉄筋で固定する。後ろには幕を吊るす。格子などもはめる。花道には黒い布を敷いて縁には赤い布を敷く。建築関係者もあり、その人が中心になって組み立てる。部材は漆などが塗られてあり非常に豪華である。完成に近づく、「春日山」と書かれた提灯と看板を会館の入口に掛け始める。提灯は電気が付く仕様になっており、提灯の下に突っ張り棒をつける。看板には「春日山若い衆詰所」と書かれている。また、舞台の前に拍子木と台を置く。

九時四三分に設営が終わった。舞台の幅は畳二枚半分くらいで、二階の奥の部屋は舞台でほぼいっぱいになる。会館が舞台に合わせて作られていることがわかる。作業終了後、筆頭が挨拶し、その後衣装係の二人が残って衣装の確認をしたり、パンフレット委員は編集をした。一時からご飯を食べた。なお、この日から女性は二階には上がれず、シャガリの練習は一階の和室でおこなう。

【月宮殿（田町組）】

平成二三年三月二〇日の九時から田町会館で始まった。山蔵にしまわれている部材を田町会館に運び、舞台を設置する。

練習用の舞台の組み立て方

若い衆が量をはがした所に板を敷き、カーペットマットのピースを敷きつめて、田町会館一番奥の部屋に仮舞台の設置をしていく。舞台上の柱は長押に板を使って固定されている。残り二部屋には提灯がたくさん掲げられている。

山蔵内部の詳細 蔵の中は三階までの造りになっている。東西で部屋番号が振られており、昔はこれに従って用具を出し入れしていたようだが、現在はそうではない。柱には歴代の籤が貼ってあった。

【青海山（北町組）】

平成二三年三月一三日の稽古始めの日の午前中に相生会議所でおこなわれた。舞台の設営作業に約三時間かかる。

【諫鼓山（御堂前組）】

平成二三年三月一二日午前一〇時から御堂前町家で始まった。稽古舞台設営に先立ち中老は九時から山蔵にしまっている備品の点検作業をする。約一〇人の若い衆が舞台の組み立てをおこなう。まず稽古場になる町家の掃除をする。それから山蔵にしまわれている舞台の部材を町家に搬入する。狂言は若い衆の管轄のため、中老は組み立て作業に参加しない。しかし、中老は若い衆の様子を見て、笑いながら横槍を入れる。舞台は釘を使わずボルトでつないでいく。床・花道・柱・鴨居・欄干・面幕（ツラマク）の順に組み立てる。部材には「左前」「右

後」など設置する場所が書かれている。作業は年長の若い衆が中心となりおこなわれ、二時間程度で終了した。

調査日	場所	時間	内容	9:00	9:55	10:10
				中老八人が山蔵に集合して、蔵に収納されている飾りや舞台などの備品の点検をする。どこに何があるか、修理が必要かどうかを確認する。山蔵に入って左側に稽古用舞台の部材が収納されている。また、周囲の棚には、これまでの出番順が書かれた「席札」が打ちつけられている。古いのは天保年間。さらに戦前山曳きに渡した木の札がある。木の札には「〇番 山曳前梶」などが書かれている。なお、このとき曳山は長浜市曳山博物館に出展中である。	若い衆が町家に到着。	若い衆は町家の掃除を始める。
平成二三年三月一二日	諫鼓山山蔵・御堂前町家					若い衆が山蔵から部材を町家に搬入。皆慣れた手つきで上の段までよじ登り、手渡しで部材をおろす。中老は休憩し若い衆の様子をタバコを吸いつつ見ている。中老は笑いながら冗談ぽく「あかんで」「大丈夫かよ」と横槍を入れる。 中老によると、「狂言は若い衆の管轄。稽古場には中老も入れない。絶対入れないわけじゃないが」とのこと。

稽古場設営参与観察表（諫鼓山）

11:57	11:45	11:15	10:55	10:45	10:30
弁当が届く。	ひもで面幕の棒と鴨居をくくる。最後に障子をはめる。障子は最後にはめるが、舞台が歪んではまらないときがある。今年ほうまくはまった。設営作業終了。衣装箱を確認。なかに入っているのは稽古着と丹前である。丹前は山組持ちで使いまわしている。稽古着は普段着の上からも着られる仕様になっている。稽古のときから女形に締める帯が入っている。	若い衆は舞台の設営を続けている。釘は使わない。ボルトでつないでいく。はじめに床の部分を組み。つぎに花道を組む。そして柱を立て鴨居を渡す。それから欄干を取り付けたら、面幕を鴨居に吊るす。面幕を吊るす棒は古い物のため慎重に取り付ける。前柱を立てる。舞台の床に穴が空いていてそこにはめ込む。 若い衆はタバコを吸いつつ組み立てる。「意外とあっさり組み立てられるもんですね」「思ったより早い」「でも、障子がはまればいいのだから……」	中老は山蔵の戸の門を直す作業をしている。以前はずれてしまい戸がきちんと閉まらなくなっていた。 中老は作業が終わり、四月二日の曳山交替式の打合せをし、解散。	若い衆が「諫鼓山山組稽古場」と書かれた看板を町家の二階の窓に取りつける。また、町家二階で部材を組み立て稽古舞台を作り始める。「毎回わからんわー」などという。若い衆の服はジャージなど動きやすい服。大体一〇人くらいで組み立てる。	「二年前の集中ゲリラ豪雨のときに伊勢湾台風以来山蔵に水がついた。米川があふれた。それで山蔵に湿気を取るため石灰を敷いた。山蔵は川の傍にある。防火の関係かもしれない。（中老）」 中老は山曳装束を四月二日におこなわれる曳山交替式に使用するため曳山博物館に持っていく。箱には文政五年と書かれている。



稽古場設営（諫鼓山）部材を取り出す（平成23年3月12日10:14撮影）



稽古場設営（春日山）部材を取り出す（平成23年3月6日9:09撮影）



稽古場設営（諫鼓山）組み立てる。部材の裏に「右前」などと書かれている（平成23年3月12日10:55撮影）



稽古場設営（春日山）提灯と看板を取りつける（平成23年3月6日9:40撮影）

(4) 祭りまでにおこなう主な集会

祭りまでには總當番と各山組でそれぞれ集会がおこなわれる。總當番では前年の十一月一日と二月一日に山組集会、四月一日に總集會がおこなわれる。一方、各山組での集會は年明けから二、三回おこなわれる。ここでは月宮殿と諫鼓山を主に取り上げる。ともに祭り前最後の集會で、外題・三役・役者・役割分担が発表された。

總當番

山組集會（初集會）は、翌年四月の祭礼を迎えるための全山組集會で、事前の出番山組集會のあと、十一月一日に長濱八幡宮の參集殿で總當番の招集によって開催される。ここでは主に出番となる山組の出場意向の確認をする。

二月一日は、山組集會が長濱八幡宮の參集殿において開催され、出場の正式決定と、外題・振付・太夫・三味線の発表がおこなわれる。

四月一日は、曳山祭の祭典執行にかかわる事項の決定をする總集會が長濱八幡宮の參集殿でおこなわれる。

【月宮殿（田町組）】

主な集會として、一月七日に若キ中新年役員會、二月五日に若キ中新年總會、三月六日に出番山組臨時集會がおこなわれた。ここでは三月六日におこなわれた出番山組臨時集會を取り上げる。

出番山組臨時集會は三月六日一九時から田町會館で中老・若い衆によつておこなわれた。この場では、外題・三役・役者・御幣持・御幣宿・籤取人・予算・役割分担などが発表される。その後宴會がおこなわれる。

参加者 祭典委員二人（中老）・保全委員一人（中老）・正副負担人各一人（中老）・祭典委員二人（中老）・若い衆筆頭、そのほかの中老と若い衆と合わせて一八人。中老の役員はスーツ。それ以外は平服が多い。

議事次第 負担人挨拶・御幣持・櫛持・御幣宿・籤取人・外題・配役・三役を発表する。続いて筆頭から外題についての説明がある。説明によると長浜では九〇年ぶりの上演で、踊りがたくさんあり、内容的に見やすい芝居とのことである。それから負担人から、中老の役割分担・予算内容の内訳・稽古宿詰番にかかわる各町当番が発表される。

配布資料 「月宮殿田町組山組臨時總會 次第」「平成二二年度月宮殿田町組経過報告」「平成二三年度月宮殿出番會計予算書案」「平成二三年長浜曳山祭月宮殿田町組役割表（案）」「平成二三年長濱曳山祭自治會当番表（案）」「配役・外題・役者名」「修理関係資料」

調査日	時間	場所		内容
平成二三年三月六日			田町會館	
18:58				女性が全員にお茶を配る。
19:02				開會 司會進行は副負担人。まず負担人が挨拶をする。臨時集會での議題として、三役・外題・役者の発表・中老役割分担・予算案・稽古宿詰め番にかかわる各町当番があることを説明。
19:03				副負担人から配付資料の確認

出番山組臨時集會参与觀察表（月宮殿）

19:27	19:22	19:14	19:09	19:05
負担人から平成二三年度経過報告	負担人が御幣持・榊持・御幣宿・籤取人・外題・配役・三役を発表 外題は月宮殿では初めて、大正六年に孔雀山が演じて以来のものであることを説明。 続いて筆頭より外題について説明。「長浜では九〇年ぶりの外題である。振付は前回と同じ岩井小紫先生であり、女性が主役の外題を選んだ。今回のお話はおもしろい展開で、煙草屋さんとかつて遊女であった八重桐の二人が主役。それに伴ってお姫様や悪人役などが出てきて、泣ける芝居というよりはその場その場で心地よい内容。踊りもたくさんあるし、稽古をご覧になっていただけたら。内容的には見やすい芝居。」	今後の日程について説明	負担人から、中老の役割分担について説明 「運営委員までは山組の役員が務め、あとは責任者を中心にお願いをしてまわりたい。」「資料の裏面は中老の裸参り警護の分担。八〇歳までの方にお願いましたが、病氣の方もおられるのでその点を考慮した。中老の方は警護に出ていただきたい。日程の都合の悪い人は三月中旬までに申し出てほしい。」 副負担人より補足。「中老の人数が高齢化によって減ってきて困難な状況。全員体制で臨みたい。」	負担人から、稽古宿詰番・裸参り警護・曳山泊り番について当番表（案）に基づき説明 三月二十五日から四月一六日まで。各自治会の一番組に書いた。各自治会によって大きさが違うので、それに合わせて割り当てた。例年のように詰番をお願いしたい。」 副負担人から補足。「詰番については各自治会で細部は調整していただければ。稽古時間は若い衆の方で設定していただくが、例年同様、午前・午後・夜と時間設定してもらえ。四月九日からの裸参りでは、（午後）八時半から夜は九時半までとあるが、若干前後することもある。資料の下に載っている山飾りや試し曳き、自町狂言は全町でということになった。以前は二町ずつのこともあったが、とくに一三日、自町狂言がある一四日・一六日が、三山連合などの若い衆の曳き手がないので、平日だにご参加いただきたい。中老さんに三日間の出欠を調査していただき、とりまとめをお願いする。」

20:09	20:05	19:57	19:50	19:40
保全委員長から今後の修復修理の日程などについて説明 三月二二日の管理委員会で確認と微調整。管理委員会は行政・専門家・業者・山組の四者で構成されている」旨の説明。獅子頭の保護カバーはまだできていない。電気配線は三月二六日以降。月宮殿の照明はLEDに決定。正式な注文も終了。現在、電球を照明器具に取付中。	副負担人から三月一九日にためし曳きと完成披露がおこなわれる旨、およびその際の時間について説明	副負担人からハッピなど衣装について説明 「市からの宝くじ助成で、山曳きハッピ五〇着、いつものハッピ八〇着を作成した。まだ納品はされていない。京都の業者をお願いした。また、小舞台の衣装、袴・袴が老朽化したので新調した。」	若い衆副筆頭から連絡 「裸参りのときに、自治会を通じたうどんの振舞いをお願いしたい。各家庭にお手数をかけますがよろしく願いたい。一六日午後、自転車タクシーの収益金を通じた慈善活動として、七〇歳以上の田町の人にお弁当を配布するが、留守の場合、ご協力をお願いしたい。」	中老から三番叟の抽選会の結果が報告される

【青海山（北町組）】

日程 二月五日、祭典委員会は三月一八日。

場所 相生会議所。

【諫鼓山（御堂前組）】

主な集会として一月初旬におこなわれる若い衆初寄りと三月一日の若い衆総寄りが挙げられる。また、中老の集会や祭典委員会も別におこなわれている。ここでは三月一日におこなわれた若い衆総寄りを取り上げる。

若い衆総寄りは三月一日二〇時から御堂前町家で若い衆によりおこなわれた。この場で外題・三役・役者・御幣持・榊持・曳山祭までのスケジュール・役割分担が発表される。その後は宴会がおこなわれる。

参加者 若い衆のみ二〇人。

席次 籤取人が上座の中央に、籤取人の右隣が筆頭、左隣が直前筆頭。副筆頭は筆頭側の上座から順に座る。ハツピを着ている人は下座に座っている。若い人が下座というわけではない。山組外の人が下座に座ることが多い。

服装 服装は着流しに羽織や、スーツなどと様々であった。スーツと軽装の人は若い衆のハツピを上羽織る。皆扇子を持参、膝の前に置く。籤取人は黒の羽織に白地に黒い縦じまの袴を着ている。それ以外の人の着物は紺色の羽織袴で袴は紺色である。

内容 筆頭・直前筆頭・籤取人らの挨拶のあと、外題・三役・役者・御幣持・榊持が発表される。さらに日程発表（舞台設営・稽古日程・起し太鼓・祭礼日程など）、副筆頭から詰め番の発表がある。役割分

担発表。裸参りの説明。その後直前筆頭の合図で乾杯、宴会を始める。
締め言葉 筆頭、籤取人、直前筆頭の順で挨拶をする。その後、直前筆頭の仕切りで起立して一本締めをする。そして「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声と手拍子をする。しばし掛け声と手拍子をし、静かになると、再度掛け声と手拍子をする。これを三回繰り返し、終了した。



出番山組臨時集会（月宮殿）（平成 23 年 3 月 6 日 18:53 撮影）



若い衆総寄り（諫鼓山）（平成 23 年 3 月 1 日 20:13 撮影）

第七項 稽古

【春日山（本町組）】

稽古は三月二二日から祭りの直前までおこなわれた。稽古が始まる前から役者は個人で稽古をしている。稽古一日目は台本読みをした。二日目からは立ち稽古をした。立ち稽古の初めはすり足の稽古をした。四月七日から太夫・三味線と合わせて稽古をした。なお、線香番まで稽古場は女人禁制となる。ここでは稽古中盤の四月三日・五日を中心に見ていく。

稽古中盤 立ち稽古をした。太夫・三味線はまだいない。役者は普段着で稽古場に来て、練習用の衣装に着替える。稽古中盤になると、役者は一人で着替えることができる。化粧は祭りの当日までしない。そして、振付が「始めましょう」といい、役者一同「よろしくお願ひします」といってお辞儀をして始める。

稽古の仕方は、役者一人を抜き稽古したり、踊りだけを指導したり、全体をとおして稽古をしたりする。また指導方法は厳しい。以下に指導の例をいくつか挙げる。「すべてを包み込むように（演技しろ）」「おまえやったらできると思っている（出来ない子に怒るときに）」（表情を）ふっとお花が咲いたように」。このように表情や顔の向きや、心情を解説しながら指導をする。役者同士で、振付を考えさせることもある。舞台方は休みの子の代役をする。

休憩中も振付は役者にアドバイスをすることがある。そのほか役者はジュースを飲んだりDSなどのゲームをして過ごす。

稽古が終わると役者一同「ありがとうございました」と挨拶をする。詰番は拍手をする。

詰番の役割は①太夫と三味線の音を操作して流す、②着付けの手伝いをする、③小道具を準備する、④稽古の進め方を振付と決めるなどがある。

稽古日程 三月二二日から四月一二日。稽古は基本的に朝・昼・夜に分かれていて、朝は九時半から一一時半、昼は一三時半から一六時半、夜は一八時半から二〇時半。朝と昼の稽古が終わると一度家に帰り食事をする。

稽古宿 春日会館。

詰番 朝・昼・夜一人ずつが割り当てられている。すべて若い衆が当たる。しかし、詰番以外の若い衆も何人か来て、着付けなどの手伝いをするところがある。

振付と台詞のつくり方 振付は、稽古の場で振付けを決めていく。「釣女」は、常盤津ものを義太夫にしているのでもともとカタがない。したがって振付がオリジナルで振付けする。

台詞は稽古中に細かいニュアンスなどを修正する。醜女役の台詞は「お〜うれし」だったが、「おつ。うれし」といったのがおもしろかったので、それを採用した。

練習 稽古が始まる前に、太夫と三味線へ台本を送り、三味線と太夫の音を録音したテープを作ってもらう。太夫と三味線が来るまで、そのテープを使って稽古する。太夫と三味線が一週間前に来るので、来てから振付けをいくつか修正した。たとえば、花道をまわるのが最初は三周だったのを、二周にしたりした。



稽古中の着付直し（平成23年4月8日撮影）



稽古中の振付（平成23年4月5日撮影）

【月宮殿（田町組）】

稽古は三月二五日から祭りの直前までおこなわれた。平成二三年出番山の中で稽古日数は一番少ないが、一日当たりの稽古時間は一番長い。初めは座ってヨミナライをし、三月二六日の昼から立ち稽古をする。

詰番の人数は比較的多く、基本的に各日五人である。若い衆・中老とも詰番をする。特徴として、舞台後見など詰番以外の山組の人が練習に頻繁に来ること。また、詰番の稽古への関与が多いことが挙げられる。詰番の役割は①三役と役者の送迎、②音源テープの操作、③指導内容や要望の記録、④振付からの小道具や稽古運営に関する要望を受ける、⑤難しい言葉を子どもに教えるなどである。平成二三年の外題では若い衆が太鼓と笛を演奏した。

稽古序盤

稽古当初は振付と役者が向かい合って座り、ヨミナライをした。三月二六日の昼から本格的に舞台上で立ち稽古をした。稽古の最初は声の大きさを第一に注意した。ヨミナライのときは、舞台に即して場所や状況に結びつけて台詞を説明する。

立ち稽古が始まると役に対する意識がかわるのでたすきや小道具をつけるようにする。舞台後見との打合せもこの時期から始めた。

調査日	時間	内容	場所
平成二三年三月二六日	9:00	振付・役者・小舞台（舞台方）が田町会館に集合 役者と正対して振付が座っている。振付から向かって左から小舞台役・煙草屋源七役・太田十郎役・月宮太郎役・沢潟姫役・腰元お歌役・八重桐役の順に並ぶ。役者・小舞台たちは全員が台本を前にして座っている。若い衆は五人（筆頭、副筆頭含む）。さらに写真撮影に来ている中老一人。 振付がほかの山組でインフルエンザが流行っているので、うがいと手洗いをするよう注意する。また台詞の出来がいいので、今日から立ち稽古に移行することを告げる。「小舞台は大切やから頑張ってね」と小舞台に声をかける。	田町会館
9:13		読み稽古開始 振付が指示を出して一緒に台詞をいってイントネーションを直す。また、読みが単調にならないように、舞台上の情景や登場人物の心境と結びつけて指導する。たとえば、「毎日二〇〇通、二〇〇通」「千石船」といった箇所は大げさにいう。大きなものは大きそうにいう。八重桐役に対して「何ゆえのご生害にござりまする」は「ビックリしたように」など。	

狂言稽古参与観察表（月宮殿）

10:25	9:50	
稽古再開、二度目の読み稽古 三味線・太夫・浄瑠璃から台詞に入るときのタイミングを子どもたちに教える。また、相手の台詞を受けて台詞をいうように指示する。 舞台上での仕草など動きを交えた指導が多くなる。たとえば、源七役に対して『角が生えたら』のところは（両手の人差し指を頭のところに持ってきて）「こういうふうにするからな」。また姫役に対しては「（たもとを口にかけてくる仕草をしてみせながら）こういうふうにするからな」など。 感情の入れ方についての指導をする。たとえば、八重桐役に対して、右手でキセルを突き、左腕を曲げて左側に出して、偉そうなポーズをとらせながら台詞を指導。 「さすがは流れの、女じゃなあ」↓「怒っているてる」 「ホホホホホ。親の敵は幾人（いくたり）ある」↓「ホホホホホ」は「高く笑ってみて」 「すがりながら泣く」↓仕草を見せる。	休憩 振付は「だいぶ上手になった」「次は私や次は私やと思わないように、相手の台詞の最後がわかるように覚える。台詞のきつかけを作る」ことを指示。	声色のかえ方についての指導をする。八重桐役に対して源七の魂が乗り移るところで、「なにそれがしを女とな」以降の台詞で、男性と女性の声の使い分けをするように指示。 小舞台役への指示が昨日より多く具体的になる。たとえば、煙草屋源七が切腹するところで、小舞台役に「このときに肌脱ぎをするので、小舞台はそのときに手伝ってあげるように」と指示。『刀出す』と書いてあるところに『肌脱ぎ』と書いてくだささい」と指示したり、沢潟姫が奥に行くところで、小舞台が片づけることを指示する。

14:38	14:30	11:48	11:35	11:17
午後稽古開始 お歌・姫登場場面の立ち稽古 「よろしくお願いします」と役者が振付に挨拶し、稽古開始。 振付が「羽織を脱いで立ち稽古を進めていこうね」と呼びかける。小道具を持って役者たちは舞台裏へ行く。振付が呼んだら障子を開けるように指示。腰元お歌、続いて姫が障子から入るときの稽古をする。基本的に役者を舞台に上がらせて、正面から振付が動き方を実演しつつ指示し、役者がそれを真似するという仕方で教えていく。 まずはお歌役が障子の開け方を稽古。お歌が障子を開けるときの顔を左本人から見て）に傾ける姿勢や角度を稽古。腰を下げて障子の外に出て、姫の手を取って障子の外の台に上がらせ、座らせる稽古。その間、小舞台は姫の裾を直す。お歌役は台から降りて、客席と姫の間の角度にお辞儀。その際の手の角度について注意される。	小道具についての指示 振付が「小道具を身につけることで、読み稽古とは役に対する意識がかわってくる」という。煙草屋源七のたすき、太田十郎の刀、八重桐の笠が小道具に当たる。若い衆に対して「稽古のときはたすきをしていることで役についての意識が少し違ってくる。たすきなどは一手間かかるため、大人がつくように。そして大人がすぐに出してあげられるように」と指示する。役者に対しては、「集まれといったときには、自分の持ち物を持つてくること」と指示する。「皆が総出でやらんと。鳴り物もあるし。」 これとは別に舞台に出しておく舞台道具（座布団・脇息）の確認もする。	稽古終了 振付は若い衆と小道具について打合せ。	この日役者たちは、父親とともに八幡宮へお祓いにいく。	三度目の読み稽古 振付から「本を持たなくてもできるように。できる人は持たないで」と指示が入る。また現代語に直していい方をつかませたりする。さらに長い台詞になると早くなるので、節をつけて急がないようにさせる。 役者親がスーツで入室

20:02	20:09	20:16	20:55
舞台後見と振付の打合せ 舞台後見が振付に挨拶し打合せをする。花道の幕の上げ下げ・台の移動・幕の段取りなど。振付は「やっているうちに（決めることが）だんだん出てくる」といい、さらに場面転換の声を引く張るかどうかについても打合せ。詰番と思われる若い衆が野菜の盛り合わせを用意。舞台裏に持っていた。 稽古の準備 振付、太夫と三味線の音が入ったMDの編集を若い衆に依頼する。 筆頭が持つて来たティッシュの五箱セットを風呂敷でくるんで、三味線のかわりにする。	稽古再開 お歌と姫の登場場面。振付は姫は本番打掛を着ているため、登場するとき大人が手伝うよう舞台後見に指示する。	稽古終了 役者はそれぞれ若い衆に伴われて帰宅する。	

稽古中盤 四月一日の夜に、最後の振付けが決まり、四月二日にとおして全部芝居ができるようになった。四月三日は、とおし稽古をした。また、舞台後見も稽古に加わり、本番を想定した動きをした。舞台に面幕（ツラマク）をつけ、舞台後見が振付の指示に従いながら、幕の上げ下げをする。また、役者の所作に合わせてツケを打ったり、太鼓を鳴らす。鳴らすタイミングも振付の合図に合わせる。

台詞の難しい意味を子どもに説明するのも大事である。台詞中の「血は滝津瀬…」のところは言葉がものすごく意味を持っている。そういうところを子どもに説明するのも大事であるという。

振付は、役者の表情がかわってきたことを汲み取り、役者自身も

面白くなってきたのだという。

手や首の動きといった細かい身振り、表情の作り方、台詞の速さのかえ方など、指示が細くなる。

稽古終盤 四月五日昼の稽古から太夫と三味線が合わせた。役者は三味線と太夫が珍しく、太夫と三味線の動きを目で追ってしまい、台詞をいい忘れたりすることもあった。また、太夫と三味線の音が大きくて驚くこともあった。稽古終了後は太夫と三味線の周りに役者が群がった。

四月七日の夜にはブッカエシの仕掛けのついた衣装を着て稽古をした。役者が衣装を着ても暴れるので、振付が再三注意する。時間を計つてのとおし稽古をした。振付はほぼ指示や注意を出さない。とおし稽古後、振付は役者に細かい指示を出した。

役者は振りがまだぎこちなく、振付の所作を見ながら動いていた。また、振付は舞台後見にツケの指導をした。一緒に打ってタイミングを教える。

三役初顔合わせ、三役・役者・役者親初顔合わせ 四月五日の朝九時半から田町会館で三役初顔合わせをした。三役と、線香番で三味線の代役をする若い衆の一人が、外題を一度とおしたあとに、振付主導で打合せをした。主な打合せ内容は、台詞や振付とのタイミングや台本の変更に伴う修正についてであった。また芝居上の役者の癖を補うための打合せもした。

三役初顔合わせ後、一一時半から田町会館で三役・役者・役者親が初顔合わせをした。全員の自己紹介と挨拶のあと、負担人と役者親から三役へそれぞれ祝儀を渡す。

調査日	場所	時間
平成二三年四月五日	田町会館	
9:10	内容	三味線の豊澤清次郎氏が先に到着し、田町会館外で喫煙中。 若い衆相談役と清次郎氏が打合せ。服装は和服。この日は三味線下座の方はいない。打合せをする若い衆相談役は、三役修業塾の塾生で、線香番に来られない清次郎氏の代役をする。 役者が田町会館に到着する。 9:15 役者がゲームセンターに行く 役者は一人を除いて田町会館に到着していたが、詰番と思われる若い衆二人に連れられて、着物のままゲームセンターに遊びに行く。 9:32 太夫到着 太夫の竹本美功太夫氏が到着。服装はスーツ。年齢は八三歳。平成五年より長浜曳山祭の太夫を担当している。 9:34 三役打合せ 振付・太夫・三味線・若い衆相談役の四人で打合せを開始。若い衆相談役は線香番に来られない三味線の代役をするため、打合せに参加している。外題を一同り四人で合わせ、うまくいくかどうか確認。調整が必要な箇所は即座に、振付が中心になって修正作業を進めていく。 振付「ここに『松浦瀧』を入れて下さい（太夫に対して）。」 振付「奥より女中、走りで」を「奥より女中、走りで〜」の、〜の部分に三味線を入れるように指示する。 9:40 台本の変更に伴う、三味線と太夫の変更について修正をする。 三味線もその場の判断で、即演奏を変更し、台本に朱を入れる作業をおこなう。また清次郎氏は若い衆相談役に対してわかるように、それぞれの箇所での三味線の入れ方を確認する。 振付は同じ演目の台本（大歌舞伎）を出して、そのときの太夫の台詞を確認する。 さらに役者の状況に即して三味線に対して注文する。振付「今、私がいわないと太田十郎と月宮太郎と一緒に前、向かないから、三味線で合図して。」

三役初顔合わせ、三役・役者・役者親初顔合わせ参与観察表（月宮殿）

10:15	三味線について、三味線は若い衆相談役に対して説明。 三味線と振付のやりとり 三味線「よく姐さん、こんだけ短く作りましたね。ちゃんとつながるようできてるから。」 振付「まだ（年が）小さいのよ、八重桐以下がね。一生懸命覚えてるから。」自分の頭の中にあるの（本来の歌舞伎のカタか？）とはだいぶ違うけど、しゃあない。」「囃子もね、ここの若い子にやらせて。太鼓とかなでるからね。キとツケはわからないと駄目（うまく打てない）。全部曳山に乗せると五、六人登ることになるのよ。」「笛も入るのよ。」 三味線「そりや笛が入った方が賑やかですよね。」 振付「一番山とかになると、後がしょげてしまう。」 三味線「朝、一番山だとちよつとえらい（演目）ですよ。」 振付「三番山くらいがちょうどいいわね。ここの山は、いつもそのくらいよね。」 三味線「短くするとよくわからなくなる。重乃井とこれは、人によって違うのでかえってやりやすい。煙草づくしもやらない人いるでしょ？」 「かなり縮めてあるので、三味線の元を知っていると怖い。全くの新作の方がわかりやすい。」これは、あたるんじゃないかなあ。」 振付「これから音が入ってくると、間がかわってくるから、また練習せな。」 振付「（豊澤）重松さんも本当はこれ（この演目）を、やりたかったと思う。」 打合せ終了 打合せが終了し、役者親との顔合わせの準備。太夫は和服に着替えるため一旦宿に戻る。 役者戻る 外に遊びにいった役者が戻ってくる。	10:47
-------	--	-------

12:00	11:50	11:45	11:40	11:35	11:33	11:31	11:30
負担人の挨拶で終了。	負担人よりパンフレットと扇子を三役に渡す。 全員にお茶が出る。	振付（親向けへの言葉として）「一〇日ほどいたしましたら、お行儀よくなってきました。役者は上達しています」（子ども向けの言葉として）「今日から太夫と三味線を入れての稽古だけど、テンポがかわってくる頑張りますように」頑張つて楽しい芝居を作りたい。身体に気をつけて。」その後、太夫と三味線が挨拶をする。	三役へ祝儀を渡す 負担人と副負担人から三役に田町組からの祝儀を渡す。扇子に載せて渡す。続いて役者親から三役に祝儀を渡す。役者親代表が祝儀を持ち、ほかの役者親が持つ扇子の上に載せて渡す。	役者、役者親の自己紹介 まず役者が自分の名前と役名をいい、続いて役者親が挨拶。負担人側から見て奥に座っていた八重桐役・太田十郎役・沢潟姫役・お歌役・月宮太郎役・源七役・小舞台役の順番。三役係もこのとき紹介した。	役者親代表挨拶 役者親代表の太田十郎役の親が挨拶。役者親代表は主役の親とは限らない。	三役紹介 負担人による三役の紹介。振付・太夫・三味線の順に紹介。	負担人挨拶 副負担人が司会で、負担人が挨拶する。大震災が起こったが、この祭りをおこなえることを嬉しく思うことを伝える。 三役・役者・役者親初顔合わせ 負担人と副負担人が進行役として下座に座る。そこに向かって右側奥の床を背にして三役（奥から振付・太夫・三味線の順）。三役と対面する形で、役者。その後ろに役者親が控える。

稽古日程 三月二五日から四月一二日。基本的に一日の稽古は三回に分けておこない、朝稽古は九時から一二時、昼稽古は一四時から一六時、夜稽古は一九時から二一時。ただし、四月九日以降の朝稽古は一〇時または一〇時半から一二時、昼稽古は一四時から一五時半、夜稽古は一七時半から一九時と短縮する。

稽古宿 田町会館。

稽古着 着物。着物は自前もあれば借り物もある。また自作や親のものをそのまま使っている場合もある。女形は、それに慣れた方がいいので、女の子の着物を探してくる場合もある。稽古期間は、役者は一日中着物を着ているし、物に引っかけたりもするので、三、四着用意する。

詰番 各日五人。責任者一人・副責任者一人・担当者三人。若い衆・中老がおこなう。山組の各自治会の戸数の数に応じて割り当てる。詰番の回数は仕事に支障のないように一人二、三回にしているが、役者方は当たる回数が多い。後見は一日一回稽古場に顔を出すこと、役者方は一日一回は送迎にすることが望ましいとされる。さらに、ほかの若い衆も、詰番以外の日でもできるだけ稽古場に来ることが望ましい。

山組の各世帯はサラリーマンが増えたが、それでも祭りのときは休みを取り詰番を務める。詰番をきっちりすると狂言がよくなる。

詰番の仕事 主な仕事は次のとおり。①詰番は役者と三役の送迎をする。四月四日から一二日は小学校の登校日なのでハッピー着用で迎えに行く。下校時間について学校の先生とも打合せをする必要がある。②稽古宿の施錠。詰番は八時までに田町会館に集合する。鍵は中老か負担人、もしくは前日の詰番から受け取る。③稽古場の清掃。

④振付の指導内容を日誌や台本に記入する。⑤子どもへの指導。稽古が進むにつれて、繰り返し注意されている箇所がわかってくるので、その内容を休憩の間などにそれぞれの子どもに対してわかりやすく教えて理解させる。たとえば、前回は花魁が主役だったが、「花魁」「遊女」がどういう人なのかを子どもにも説明しなくてはならない。ただし、教えずぎると変な癖がつき、振付に指導されても直らないので、教えずぎないようにしている。また、台詞だけでなく、振りも覚える。⑥太夫と三味線の音源テープの操作。詰番の若い衆二人が台本に付された番号と照合しながらテープを流す。一人が流すタイミングを合図し、もう一人がリモコンでテープを操作する。音の途中でテープを止めるときは、振付が右手で若い衆に指示する。

音響 若い衆が三味線と太夫の入ったMDを用意し、三役が揃うまで使う。また振付が三味線と太夫の部分を口でいうこともある。

練習用のテープ 台本と振付が各役者ごとの台詞を録音したテープを事前に配布し、それを各自が覚えてくる。

役者の声の出し方 本番はマイクを使うが、振付はマイクなしで聞こえるのが望ましいと、お腹の底から声を出すように指導する。また、裏声は声を潰すので出さないように指導する。

女性が振付の場合の制約 月宮殿の振付は女性のため、曳山の舞台に上がれないが、稽古舞台には上がれる。

指導の方法 基本的に役者を舞台に上がらせて、振付は舞台の外で動き方を実演し、役者がそれを真似る。

指導の指針 自然に演技させるのがいい。無理に表情をつけると嫌味になるので、素直に演技させる。子どもは慣れてくると表情に力

を入れてやろうとしたりするが、それはよくない。表情についてはあまりいわない。

台詞の変更 台詞を現代風にかえることがある。たとえばタバコの銘柄は現代のものにする。

子どもの台詞覚え 子どもは台詞も太夫の浄瑠璃も覚えていく。

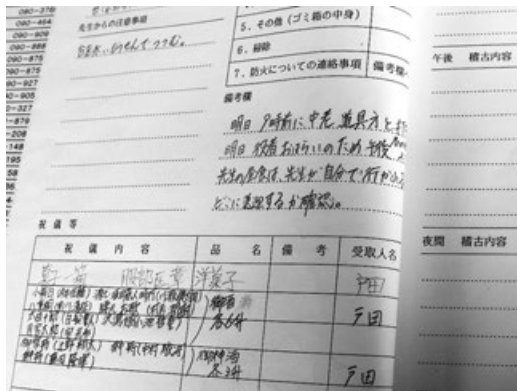
小道具・たすきが役者に与える意識の変化 稽古のときはたすきなど小道具を身につけることで役への意識が少しかわってくる。また、子どもたちはヨミナライのときと比べて、立って稽古したり、衣装や髪をつけるとさらに台詞のいい方がかわってくる。

子どもたちの遊び 子どもを遊ばせるのも大事である。短い時間で仲が深まり助け合いの意識が生まれる。以前、一人が病気になったとき、その穴をカバーしようと動く子どもがいた。

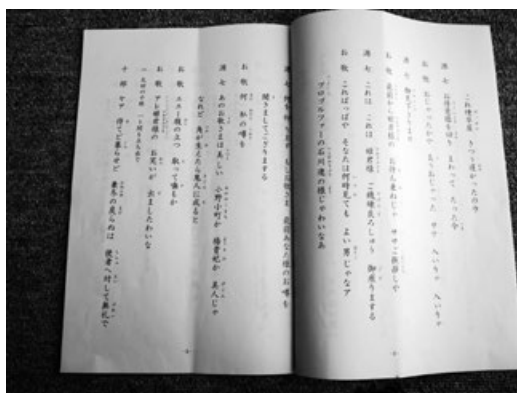
ほかの山組の稽古訪問 ほかの山組からも稽古場に挨拶に来る。三月二六日の稽古時には、月宮殿と三山連合を組んでいる猩々丸の人がお酒を持って挨拶に来た。月宮殿の筆頭が挨拶をし、猩々丸の人は一〇分ほど稽古を見学した後、退出した。

稽古への役者親の関与 稽古は線香番まで非公開で、親にもマスコミにも見せない。振付の指導には親に口を出させない。役者親がいると振付が遠慮してしまう。また子どもも叱られているところを親に見られたくない。振付が考えて指導しているにもかかわらず、その意図が誤解されてしまうこともある。

道具 大道具や置き道具は山組が用意する。持ち道具の一部も山組が用意する。残りは衣装屋が作る。山組内にいろいろな職人がいるので、何でも山組で作ることができる。また、長煙管など手に入り



詰番日誌 (平成 23 年 3 月 26 日 11:59 撮影)



台本 (平成 23 年 3 月 26 日 11:55 撮影)



ツケを打つ舞台後見 (平成 23 年 4 月 7 日 19:43 撮影)



三役・役者・役者親顔合わせ (平成 23 年 4 月 5 日 11:13 撮影)



ヨミナライ (平成 23 年 3 月 25 日 15:11 撮影)



三役初顔合わせ (平成 23 年 4 月 5 日 9:28 撮影)

づらいものは、インターネットのオークションで購入することもある。中老に道具を用意する道具方がおり、稽古の合間に振付と打合せをする。たとえば、長刀の先の部分を段ボール何枚重ねの方がいいかなど細部まで確認し合う。

若い衆の狂言への参加 最後の場面で盛り上げるために、振付が若い衆に太鼓と笛を入れるよう要望した。

役者・役者親のお祓い 三月二六日の昼に役者と役者親は八幡宮にお祓いに行く。

【青海山（北町組）】

稽古は三月一三日から始まった。振付は長浜在住で昼間働いているため一日当たりの練習時間は少なく、ほかの山組に比べ練習期間が長い。三月二〇日まで読みの稽古をして、そのあとは立ち稽古をした。四月三日の昼から太夫・三味線と合わせた。

詰番は基本的に一人で、稽古中は自宅待機も可能である。線香番までは役者親が稽古を見ることは極力避ける。詰番の人数と役割が少ないことが特徴である。

稽古序盤 三月二〇日の朝まで読みの稽古をして、二〇日の昼から舞台上で立ち稽古をした。台詞は基本的に家で覚えてきてもらい、完璧に覚えた段階で舞台上上げた。動きを舞台上でしてみないとわからない台詞もあるので、なるべく早く上がらせるように意識していた。

稽古中盤 三月二七日の稽古では立ち稽古をした。稽古は部分ごとにおこない、最後に一度とおす。休憩は朝・昼・夜一回ずつ取る。

台詞の節のつけ方は口伝で指導する。所作は舞台前で振付が演じて見せる。台詞の意味や歴史的背景も教える。演技中の指示は台詞と所作のタイミングのみである。指導内容は声を大きく出すこと、手の位置と歩き方に注意すること、第一声に気をつけることなどである。ときおり冗談を交えつつ指導する。

太夫と三味線の音源は振付がラジカセを操作して流すが、ときどき「チャンチャン」や「チンチン」など口三味線をする。

役者は台詞を大体覚えていて、芝居中に忘れると互いにささやき合う。動きはまだぎこちない。

振付の説明が長くなったり難しい言葉があると、稽古を見にきた筆頭がそれとなく要約して伝える。また、演出方法を振付から相談されることもある。

稽古終盤 四月三日の昼から初めて太夫と三味線を交えた稽古をした。とおし稽古が中心である。なお、この日は夜の稽古終了後に役者顔合わせをおこなった。

太夫と三味線と演技の間に気をつけつつ稽古する。指導の内容は振りや踊りをどういう気持ちで演じるかを考えさせるものになる。

昼の稽古のとき、振付は稽古場に到着した役者たちに、座敷に上がったら正座して挨拶するように指導した。その日の夜の稽古から子どもたちは座敷に上がると正座して「おはようございます」と三役に挨拶するようになった。

稽古日程 三月一三日から四月一二日。練習は朝一〇時から一二時半、昼一三時半から一六時半、夜一八時半から二一時半に区切っておこなわれる。ただし、春休みが始まるまでは、日曜日以外朝と昼の練習はない。振付が昼間働いているため、夜しか稽古できないことが多く、比較的長期間稽古をする。

稽古宿 相生会議所。

稽古着 稽古宿には揃いの着物を着て、下駄履きで来る。上に丹前をはおることもある。稽古が始まる前に稽古用の着物を振付に着せてもらう。本番までには自分で着られるようになる。本番の衣装は、一三日の自町狂言まで着ない。なお、稽古用の着物は借り物である。**舞台方** 役者が急病にかかったときに代役として出なければならぬ。そのため舞台を全部覚える必要があり、舞台方も役者に合わせ

て動きの練習をする。

詰番 各日最低一人はついている。山組を構成する全町で分担する。主な仕事内容は、稽古場の開け閉め、お茶の準備である。ときには振付の言葉をわかりやすく説明したり、振付と演出方法の相談をすることもある。なお、詰番は稽古が始まれば自宅待機しても構わない。

休憩 朝・昼・夜一回ずつ。お菓子を食べたり着物を直したりする。

役者顔合わせ 四月三日、夜の稽古終了後に稽古場で役者と役者係の初顔合わせがおこなわれた。若い衆筆頭と役者係統括の挨拶後、六人の役者ごとに、一人ずつ役者係が決められ、挨拶をする。その後、役者親から役者係に酒一升を贈る。役者係の決定を終えて、若い衆筆頭心得の挨拶のあと、「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声をして終わる。

	3月13日	3月14日	3月15日	3月16日	3月17日	3月18日	3月19日	3月20日
	日	月	火	水	木	金	土	日
朝 9 時 30 分～12 時 30 分	稽古場設営							○
昼 13 時 30 分～16 時 30 分	○							○
夜 18 時 30 分～21 時 30 分	○	○	○	○		○	○	○
	3月21日	3月22日	3月23日	3月24日	3月25日	3月26日	3月27日	3月28日
	月	火	水	木	金	土	日	月
朝 9 時 30 分～12 時 30 分						○	○	○
昼 13 時 30 分～16 時 30 分	○					○	○	○
夜 18 時 30 分～21 時 30 分	○	○	○		○	祭典委員会	○	○
	3月29日	3月30日	3月31日	4月1日	4月2日	4月3日	4月4日	4月5日
	火	水	木	金	土	日	月	火
朝 9 時 30 分～12 時 30 分				○	曳山交替式	○		○
昼 13 時 30 分～16 時 30 分	○	○		○		○	○	○
夜 18 時 30 分～21 時 30 分	○	○	○	曳山総集会		役者顔合わせ	○	
	4月6日	4月7日	4月8日	4月9日	4月10日	4月11日	4月12日	
	水	木	金	土	日	月	火	
朝 9 時 30 分～12 時 30 分	○	○	○	○	○		○	
昼 13 時 30 分～16 時 30 分	○	○	○	○	○	○	○	
夜 18 時 30 分～21 時 30 分	○		三役顔合わせ	線香番	○	○	○	

狂言稽古日程表（青海山）



小道具（平成23年3月27日16:19撮影）



青海山稽古宿（平成23年4月9日11:46撮影）



太夫と三味線を交えた稽古（平成23年4月9日11:13撮影）



役者顔合わせ（平成23年4月3日20:22撮影）

【諫鼓山（御堂前組）】

稽古は三月二〇日頃から始まった。稽古序盤は席について台本を読む（ヨミナライ）。本年度は台詞が多かったことと、体調不良による欠席者が多かったため、ヨミナライの時間が例年より長かった。稽古を始めて一週間くらいから立ち稽古を始めた。そして、四月五日前後から太夫と三味線を交えた稽古をした。太夫と三味線が入る頃にはおおかたの振付けが出来上がっている。四月九日の線香番以降は公開稽古で町内の女性や役者親などが見にくる。

稽古には四人の若い衆が詰番をし、主な役割として以下のことが挙げられる。①太夫と三味線の音を流したり効果音を鳴らす。②振付の指導内容・要求などを記録する。③お茶汲みやお菓子の用意をする。さらに笠や刀など衣装にかかわる物以外の小道具や仕掛け、効果音は若い衆で用意する。④指導や演出に若い衆がかかわることはないが、礼儀作法へは注意をする。

基本的に線香番まで若い衆以外は稽古場に立ち入らないが、厳密ではなく、若い衆が仕事で詰められないときは親である中老が詰番に来ることもある。また、以前役者をした中高生が頻繁に見にきたり、役者よりも年少の子どもが来ることもある。役者親も詰番をする。

稽古序盤 台本を読むヨミナライを中心におこなう。声量、節回しが出来てくると、感情の入れ方を指導する。ヨミナライだけだと飽きてくるため、歩き方の練習をする。異なる年齢を歩き方で表現する。例年だと稽古が始まってから五日目くらいには立ち稽古が本格的に始まるが、平成二三年は子どもたちが体調を崩しているため、遅れ

ている。子どもの学校や学年が異なるため、休憩中は振付が子どもたちと遊んで結束を深めさせている。

稽古中盤 立ち稽古をした。女形の子に袖の長い女形用の稽古着を着せ、女形の所作に慣れさせる。若い衆は着物を着せるのに不慣れなため、振付が着付けする。踊りや台詞の多い子どもの抜き稽古もおこなう。子どもに合わせて振付の手数を徐々に増やしたり、減らしたりする。

この頃になると、子どもは主体的に茶碗を片づけたり、時間になると席に座るようになる。また、踊りを増やしてほしいなどの要求をする子どもも出てくる。

調査日	平成二三年三月三〇日
場所	御堂前町家
時間	13:20 13:24 13:35
内容	喉を痛めた子が、朝に副筆頭が購入した吸入器を使って喉を潤す。前の日稽古中に出番がないとき寝てしまい、冷えたのか喉を悪くした。若い衆は詰番二人と子どもを送ってきた役者親二人。 着付け 振付と若い衆とで浪路役の子を赤色の女形の稽古着に着替えさせる。女形の稽古着は袖が長い。 立ち稽古(第二・三幕) 振付の集合の合図で席につき、挨拶。詰番でない役者親は退室。入れ違いで前回役者として狂言に出た中学生が入室。 浪路役は稽古着がかわって、袖を使った振りができるようになる。しかし、長い裾が足に引っ掛かって転ぶことも。また、新しい稽古着が気になるように、袖をしきりにいじる。

狂言稽古参与観察表（諫鼓山）

14:28	14:00
休憩 振付は詰番と雑談。「例年は四月になると昼は休んだったが、今年は無理そうだ（振付）」、「前回は（子どもが）大きかった。二度上がりの子がいるといい。今年は初上がりばかりで振付泣かせや。可愛いのは一瞬。でもよい悪いは全体をとおして評価される（振付）」。「前回は子どもが大きかったからトランプなど、遊び方がこなれていた。今回はじゃれているだけ詰番」。「〇〇は遊びになると声が出る。芝居になるとあかんなあ。ウンともスンともいわん（詰番）」、「二週間休んだのが堪えたんやろ。しかし、昼稽古を休む子はいはるは、声が出なくなる子はいはるは、小さい子が揃うところなる。お手上げ。線香番に間に合わん。太夫・三味線が来ると細かい稽古ができなくなる。（振付）」	振付は頼母役に感情が入っていないと指摘する。「死ぬ気やで、奥さんに二回負けるんやで、わかるよな。できるできないは別として、ちゃんとやらなあかん。頑張ってやってみる。やってみようと思わなあかん。」頼母役は顔をひきつらせて目をそらす。また、頼母役は台詞をいうときに体を前後に揺らす癖があり、振付が「自信なさそうにやっていたらお客さんに伝わる。一人があかんとほかの人に迷惑かける。みんなで作ってんねんから」と注意する。 振付は一つ一つのカタをしつかり踊るよう指導する。また、踊りの意味をいいながら振りを教える。 出番のない子は、舞台の外で壁にもたれてほかの子の稽古を見る。 浪路役の稽古着が崩れてきたので、振付が直す。振付はほか子どもに「この間に振りを思い出しとけ、ぼーっとしとらんぞ」と注意する。 第二幕の別れの場面の踊りを一度とおした後、第三幕の踊りの指導を始める。まず振付は曲を聴きながら鏡の前で振りの確認をする。そして今まで待機していた俊斎役を舞台に上げ、抜き稽古をする。扇子を使った振りを教えるも、子どもは難しいという。しかし振付が「もつと踊りたい？」と尋ねると、「うん」と答える。振付は笑いながら「大変や、考えな」という。

17:52	17:35	17:25	17:00	16:12	15:38	14:50
振付退室	浪路役の稽古着を詰番が脱がす。若い衆が子どもを送る。	稽古終了	立ち稽古(第三幕の踊り) 詰番が音源の準備で手間取り、振付は堪らず「よってたかつて振付泣かせ！」と嘆く。さらに頼母役が踊りの振りを覚えられないので「覚えろ！」と怒鳴る。 振付は教えながら振りを少しずつかえていく。	休憩 役者親からの差し入れが振舞われる。 副筆頭が烏笛と鶯笛を買ってきたので、若い衆や子どもたちで吹きまわす。	立ち稽古(第一・二幕) 振付は喉の悪い子どもに具合を確認するが、まだしゃべれないので、舞台の下に座らせ、振付が代役をする。 副筆頭が烏笛を吹く。効果音の鐘と腹の音もこのとき既に出来上がっている。 浪路役と頼母役の感情の入りが悪いので、振付は「情のないやつらだ」という。 前回の狂言に出ていた舞台方の子の動きがよいのを、振付が「さすが二度上がり」と褒める。	休憩 振付は若い衆に明日の午前中は年少の二人を休ませるよう指示する。例年三・日学校の離任式があり、稽古を休みにするが、今年は進捗が遅いので稽古をすることにする。とくにインフルエンザで休んでいた子に特訓する。 子どもたちが烏笛と鶯笛を吹いて遊ぶので、振付は詰番に子どもにも楽器を持たせないよう指示する。 「例年この時期には大体できあがっているが、今年は第一幕と第二幕の途中までしかできていない。後半はまだほとんど手をつけていない。(振付)」

21:12	20:48	20:03	19:50	19:04
片づけ 直前筆頭と、直々前筆頭が外まで振付を見送る。ほかの詰番は出入り口の提灯や看板をはずし、食器を洗う。	稽古終了 振付からの明日の稽古日程の連絡が済むと、詰番は子どもに差し入れのお菓子を配り、家まで送る。	立ち稽古(第三幕) 老人の歩き方を指導。棒立ちにならないように、手振りだけでなく、後ずさりさせたり、細かく歩いたりさせる。子どもが上手くいえない台詞を削ることもある。 顔を前に向けて話すのは芝居の決まりごと、また、台詞は相手に掛ける感じで話すお客に伝わる。 詰番が鶯笛を鳴らす。	休憩 子どもたちがスポーツドリンクを飲むと、子どもの一人が茶碗を片づける。 振付は若い衆と雑談。かつて長浜で教えた子たちについて話をする。芸が下手な子の祖母からなんとかしてほしいと頼まれたり、昔は怒られて舞台で失禁する子がいたり、子ども同士の喧嘩が頻繁にあったことなど。	立ち稽古(主役二人の抜き稽古) 第一幕の浪路役の踊りを稽古。水口氏が、浪路役の背後から腕を掴んで、振りを覚えこませる。一〇回以上同じところを繰り返す。「できない？！かしやらないかやいけなんだよ。ヤマの上に立つ限りは。」 教えた振付けを子どもたちが覚えてくると振付は踊りの振りをさらに一つ増やす。 頼母役の抜き稽古をする。動作を大きくするよう指示する。また泣く芝居は鼻をすすって上を向くよう指示する。

稽古終盤 太夫・三味線・舞台後見が入った練習をする。振付が彼らに指示を出す。太夫・三味線には本人らが弾きたい場所も聞き斟酌しつつ、制限時間に合わせるため、削る場所を決める。

振付は子どもの性格に合わせた指導方法をするようになる。ほめて伸ばす子、放っておいても大丈夫な子、子どもに合わせて要求する程度も異なる。舞台方には子どもたちのまとめ役、小道具の管理をするよう要求する。また、子どものなかにリーダー的な子が出てくる。

稽古が始まる前に三〇分程度瞑想させる。心を落ち着かせるため、祭りの間、曳山の上でじつとすることに慣れさせるためである。

町内の子で三役修業塾の塾生が三味線を教わりにきていた。

調査日	時間	内容	場所
平成二三年四月七日	9:53	子どもたちが稽古場に集まり始める。若い衆四人。	御堂前町家
10:00	瞑想	振付が到着すると、役者は舞台で瞑想し始める。振付は煙草を吸いつつ子どもの様子を見る。	

狂言稽古参与観察表（諫鼓山）

10:57	10:36	10:31
休憩 詰番が、皆に飲み物を注ぐ。振付が「お前もうセリフはぐちゅぐちゅするしーもうー」と文句をいいつつ、頼母役の着物を直す。若い衆が自分の着付けと振付の着付けの出来が全然違うことに驚きの声を上げると、振付は「でもあーやって（走りまわって）遊ぶやろ。すぐぐちゃーや。」	立ち稽古（総踊り） 年少の二人の踊りを振付と年長の三人がチェックする。その後年長の三人が踊る。主役の二人はお互い指摘し合う。年少の二人は、初めのうちは年長の踊りをじつと見ていたが、飽きると遊びだす。 踊りがあまり得意でない子が、ほかの子が踊っているときによそ見をしていると、振付が「お前一番見なあかんのや」と怒る。浪路役も「見てへんから踊れんのやで」と注意する。彼は女形で踊りの練習も一番しており、役者の中（舞台方を除く）で最年長である。振付が個人指導している間に別の子を指導することもある。 舞台の上で順番に練習しているとき、下で見る子も掛け声を掛け合いつつ一緒に踊りだす。遊んでる子がいると、「何遊んでるん」と子ども同士で注意し合う。	休憩 役者の二人が花粉症でくしゃみをする、振付は「本番で（くしゃみ）されたら困る」と笑う。 「小さい子もいるから、なかなか振りも揃わないね。（振付）」 立ち稽古（総踊り） 挨拶をして、振付は子どもと少し雑談をする。 第三幕の総踊りの稽古。詰番が後見の代役で舞台裏へ。 主役の二人は以前より老人の動作が身についてきた。振付は「（浪路役に）女形は手をきれいに」と注意する。上手く踊れない子に、踊りが多い浪路役の子が教える。 振付の「ひと一つ、ふた一つ……」の掛け声に合わせて、全員で振りの確認をする。途中から子どもたちも一緒に掛け声をかける。子どもたちは楽しそうに稽古をする。とくに浪路役の子は今まで一人だけで踊りの稽古をしていたため、皆と一緒に稽古ができてうれしい様子。 総踊りのあと、役者全員で整列して三方礼の稽古。

11:00	11:11	11:35	11:42	11:47
太夫到着 太夫が子どもに「ばっちり？」と稽古の調子を尋ねると、子どもは「たぶん大丈夫じゃないと思うよ」と答える。 子どもたちが小道具で遊ぶと太夫が注意する。	立ち稽古（第一幕） 稽古前に太夫が花粉症の子に鼻をかむよう指示。 詰番が舞台方の代役をする。詰番の一人が音響をするが不慣れなため間違える。振付が手伝うことも。 振付は頼母役に「笑うときは、声だけじゃなく顔も笑うの」と注意。 また浪路役に踊りを注意するとすぐ直ったので、振付は「さすが」と褒める。	休憩	立ち稽古（総踊り） 振りの間違えが減る。	稽古終了 振付と太夫が雑談。 諫鼓山の子を来年の壽山で借り役者しようか考えていると振付が太夫に話す。 その後カットする箇所を打合せ。線香番は第二幕をカットすることに。 しかし与八役の子が第三幕に出演がなく、出演が大幅に減ることを懸念する。 振付は一日に大阪で本業の仕事があるので、稽古を休みにするという。 その後、春日山の振付の藤間氏（水口氏の息子）が稽古場に入ってくる。お互いの稽古の進捗について話す。振付が「諫鼓山は芸の可愛らしさで勝つ」、若い衆に「うち、可愛らしいよね」と聞くと、若い衆は「ですわね。お土砂の場面が」と答える。すると振付は笑いながら「あつ、ゆうたらアカン、こいつ（藤間氏）はスパイやで。親子でもそれはゆうたらあかん」という。若い衆は焦って謝ると、藤間氏は「なるほど、お土砂ですか」と頷く。

12:08	13:45	14:00	14:12	14:20
振付らは昼食に行く。	太夫と三味線が稽古場で音に関する打合せをする。 詰番の若い衆が三名。役者OBの二名が稽古場に来ている。一人は中学新二年生。もう一人は高校生で、三役修業塾で三味線を勉強している。	稽古開始 振付が子どもたちに瞑想するよう指示すると、舞台上で正座をして、目をつぶる。その間に振付と詰番の若い衆が出演の順番や三番叟の稽古の話をする。 振付「（三番叟は）公募もいいんやけど、三番叟の子がやってくる（二番山を引いた場合の話）、最初はぎくしゃくするの。昔は山組から出したから。あれも大変やった。四〇分で教えないといけないから。今年が一番やと意気込んで、予め三番叟の稽古もしておいたら、四番やったらんやろ（諫鼓山は長年一番山になっていない）。諫鼓山、一番引いたらわからんやろ（諫鼓山は長年一番山になっていない）。」 この間、子どもはずっと目をつぶっている。瞑想の時間を徐々に長くしている。	稽古の準備 子どもは振付と太夫、三味線に挨拶。 振付は詰番に鶯笛と烏笛は口でやるが、鐘と腹の音の効果音はMDで流すように指示する。 振付、舞台方に準備が出来たら合図を要求するが、舞台方は小道具の一つが見当たらず合図が出せない。ほかの子が見つけて、第一幕から開始する。	義太夫入りで立ち稽古 子どもたちは三味線と太夫の生演奏が珍しいらしく、そちらばかり気にして見ている。

16:05	16:00	15:10	14:37
稽古開始。一幕目からおし稽古	振付・本番を想定して、子どもたちに一人ずつ舞台上がってくるよう指示する。それから舞台方へ小道具の準備ができたら合図を寄こすように指示する。また、三味線に「今日は七本でお願いします」と三味線の調子の高さを指定する。 舞台方が「できました」と振付に合図をいうと、稽古開始。	休憩 休憩時間内で、三役が集まって音の打合せ。 三味線の演奏に合わせるため、浪路役に振付けの変更点を伝える。 一方、ほかの子たちが床几や刀で遊んでいると、振付は小道具で遊ばないよう注意する。「今年は小さい子ばかりだから、ワチャワチャしてやかましいわ。前のとき、こんなことなかったやろ（振付）」三年前はトランプをしてました。（中学生） 振付は子どもが遊んでいるのを見て「子犬ががじゃれてるのと同じですよ」という。その後も子どもたちは休憩が終わるまで遊びまわる。 一六時前は騎馬を作って遊ぶ。 太夫が副筆頭に一二〇分テープの購入依頼をする。副筆頭はすぐに買いに出かける。 休憩中、高校生の男子は三味線の勝二郎氏と三味線について会話を交わす。	一幕目は一七分で終了。振付、浪路役に「顔を柔らかく」と指示。 続けて二幕目開始。一五分で終了。振付は三味線に「踊りの所だけで六分か。もつとノつてもらおうか」と指示する。

17:20	17:04	16:55
稽古終了 詰番が手分けして子どもを送っていく。 三役はカットする箇所を相談する。線香番用と本番用とを用意する。總當番から長いと指摘されないように線香番用はより短くする。振付は四〇分で芝居をするのは大変難しいことだと嘆く。	稽古再開 第三幕の浪路と頼母の立ち合いの動きなど場面を細かく区切って振りの確認をする。 振付は主役（頼母）に「俺を見てくれ、と前向くの！」というが、もう一人の主役（浪路）には「目立ちたがりだから、ほっといてもいいねん」と指導方法を明確にかえている。 太夫は再度振付に頼母役の話し方を修正したほうがよいのではと伺う。	三幕目終了 振付「全部でちょうど五〇分か。」 芝居が仕上がっていないが、次の日は午前の稽古ができないので、振付困惑する。 休憩 芝居が五〇分と長いので、三役が集まってカットする場所を相談する。詰番が子どもを集め、サイダーを飲ませている。中高生も一緒に飲んでいる。その後、子どもたちは全員トイレへ行く。 太夫が頼母役の台詞の話し方をはっきりさせた方がよいと振付に指摘する。振付は既に試みたが、難しいと答える。

20:00	19:32	19:30	19:20	18:55
筆頭と直々前筆頭が町家に来る。	一幕目から全幕とおし稽古開始。 一幕目から全幕とおし稽古開始。	稽古準備 子どもたちが振付・太夫・三味線に挨拶する。 舞台後見が子どもに「幕は自分で上げたらかん」と伝えている。 舞台方は小道具を役者に渡すタイミングを振付に伺う。	振付は舞台上がり子ども一人ひとりに話しかける。子どもたちは依然座ったままで、頑張っている。身体が傾いたり、辛そうな顔をする子、正座したまま眠る子もいる。	夜稽古 子どもたちは既に集まっている。地蔵のかぶり物をかぶり鬼ごっこをしている。この日は、舞台後見の三名が全員揃う。 瞑想 振付は子どもたちを舞台に座らせ瞑想させる。 その間に、振付と若い衆が公開稽古の日程や会場について打合せをする。振付は会場を人が入りにくい御堂前町家より、広い御堂前会館にしたいたいと要望するが、若い衆から難しいと返答される。また、拡声器で人を集めたいが、總當番から禁止されている旨を若い衆から告げられる。 振付は若い衆に人を多く入れるように呼び込みするよう依頼する。 この間、子どもたちはずっと座って、目をつぶっているが、苦しそうな様子。振付は祭りの戻り山などの時間を想定し、三〇分瞑想させることにし、子どもたちを励ます。

21:00	20:50	20:35	20:20
振付、退出。	稽古終了 挨拶が済むと、与八役（最年少）は父親の元へ飛んでいって、父親と遊んでいる。 振付が明日の稽古時間について連絡する。 振付は舞台後見に、「一幕から二幕、二幕から三幕の間はボンボンといかないと、だれると思うから」と指示する。 振付「四五分にしたいな。三分カットしたい。見てる方がだれてきたんかな。長く感じるわ。」 振付「早くカタギの生活に戻りたい」、直前筆頭「祭り終わって、なかなか元に戻れないですね」、振付「僕ら、すぐに戻るよ」と答える。	稽古再開立ち稽古（第二幕） 浪路役が頼母役の足運びを見て「こっちの足を引くの」と教えている。横から振付が「わかった」と聞くと、二人とも「わかった」と答える。 振付「お、めずらしいやないか」と笑う。 振付は浪路役に細かい動きの稽古をつける。	休憩 舞台後見と振付が打合せをする。 若い衆二人が、芝居に使う本物の桜の木を運び込む。 狂言の長さの話題になる。筆頭は線香番だけカットして、ほかはカットしないという。 外題板（曳山に掛ける外題の書かれた看板）が話題に上がる。書かれる長浜外題は中老のN氏が作り、実際外題板に書くのは看板屋とのこと。 振付が浪路役の着付けを直している最中、若い衆同士で様々な打合せをする。 副筆頭、直前筆頭らが町家に来る。

稽古日程 三月二〇日から四月一二日。午前一〇時から一二時、午後一三時半から一七時、夜一九時から二二時の三回に分けて稽古する。進捗状況や学校の行事や授業などに合わせ休みにすることもある。

稽古宿 御堂前町家。

稽古に使う物 若い衆が子どもに読みやすくルビを振った台本と、太夫と三味線が録音されたMD。鐘・腹・鳥の音などの効果音は稽古中盤以降MDができたが、それまでは振付の水口氏が口でいう。

作曲 二月頃に振付が三味線の豊澤勝二郎氏に台本とイメージを伝え、作曲する。しかし稽古が始まってからも、三役が打合せをして曲を何度も作りかえていく。古典だともとの曲を使うが、新作はこれから作曲するから手間がかかる。台詞と義太夫の文句は振付が作っている。

稽古の服装 山組で用意した稽古着。普段着の上からも着られる着物で寒いときは稽古着の下に運動着を着ることもある。毎回同じカタではない。今回の稽古着は袖が短く踊りの練習に不向きだったため、途中から袖や裾の長い女形用の稽古着を用意した。稽古着や足袋は着慣れていないため、初めは稽古中も気になっている。稽古着は家から着てくる。夜は丹前を着てくる。丹前は山組が持っているもので、毎回同じものを使う。ほかに刀を挿すための帯があり、立ち稽古が始まると練習前に若い衆が締める。段々慣れてくると子どもが自分で締め始める。稽古では最後まで本番で使う衣装を着ない。舞台方は稽古着を着ない。

詰番 今年から詰め番は四人。以前は二人だったが一人抜けると大変なので四人にした。詰め番は九時一五分から稽古場に詰める。来ら

れない場合は親類縁者に来てもらう。妻など女性も参加可能である。仕事内容は、稽古開始前は、①稽古場の清掃や、暖房や提灯を点ける、②子どもの着付けの手伝い。稽古中は、①太夫と三味線の音源や効果音を鳴らす、②振付の指導内容、振付からの要求などを記録、③三役や子どもへのお茶汲みやお菓子の用意、④客の応対、⑤振付との打合せ、⑥子どもへの礼儀作法の注意。①から③は若手の若い衆が中心におこない、④、⑤は年長の若い衆がおこなう。⑥は全員でおこなう。稽古後は、①子どもを家まで送る、②稽古場の片づけ。段取りは年長の若い衆が若手の若い衆に指示する。

稽古の進め方 粗く教えてから細部を直していく。今回は新作で台詞が多いからヨミナライを多めにして台詞を固める。四月に入ると三味線や太夫が来て、細かい稽古ができなくなる。

稽古中の振りの変更 初めは簡単な振りをさせて、上達してくるとより難しい振りにかえていく。

教えなければいけないポイント 今回の芝居で大変な部分は、感情などの気持ちを入れておこなうこと。カタが決まっているものや踊りはカタを覚えればいいが、平成二三年の外題は、とくに気持ちをに入れて、台詞がキャッチボールになるようにしていかないとならない。また、イドコやカタを決める必要もある。イドコとは居る場所のこと。

殺陣のカタの種類 殺陣のカタは何十種類もある。つぎに実際に教えたカタを記す。

（ヤマガタ） あげている刀を左下に振りおろしながら左足を一步引く。また刀をあげて右下に振りおろしながら右足を一步引く。二

人相対しながらすることをアイヤマガタという。

(テンチテン) 刀を上で合わせる、次に下で合わせる、また上で合わせる。

(ツバゼリアイ) 刀を合わせて引いて押して引く。

(ボン) ツバゼリアイをしているのを、二人で押し合ってはじかれたように離れる。

(カラス) 上から刀を斬りおろし、前に一步出る。空の白をついているような恰好からきた。

殺陣の教え方 まずカタを教え、それから複数のカタをつなげて稽古する。何度もやらせる。若い衆も一緒に振りを覚える。

子どもと大人の指導の違い 子どもの場合、振付が振りをして見せないといけない。大人だといっただけでわかってくれる。

子どもの台詞覚え 子どもは台詞を覚えるのは速いが、台詞というのも動きも速くなる。

舞台後見の稽古 稽古終盤から始まる。烏笛や鶯笛の練習は稽古の合間を縫っておこなう。

芝居に適した年齢と性格・習い事 振付によると、一、二年生は感情

移入の仕方がわからない。三年生くらいから台詞の意味がわかる。五、六年生を核に下は三、四年生くらいまでがよい。アンテナを張っている子はすぐに覚える。おっとりしている子は少し時間がかかる。絵画を習わすのがよい。

日本舞踊を習わせるのが一番よい。本やドラマの好きな子がよい。あまり向かないのは野球をしている子。今までに何人もいたが、カタが悪い。野球のカタと芝居のカタは全然違う。野球をしていると

立ち姿のときにお尻が出てしまう。腰を落とすことができない。腰を落とせというとお尻が出る。運動神経のよし悪しと芝居の上手下手はあまり関係がない。また、内股のだから柔道より、剣道をしている子の方がよい。振付の水口氏も高校生のとき剣道をしていた。

今の子と昔の子の違い 振付は今の子へは特訓できないという。昔は泣いても、稽古に来了。親がかわってきている。今は稽古を習い事の延長と考える親もいる。できなくても仕方ない、という感覚であるという。

子どもに狂言を教える意味 振付は、子どもに狂言を教えるのは教育の一環と考えている。古典や難しい言葉を覚えるだけでなく、子ども自身が自分や先輩が稽古をし、若い衆が助けてくれて、このピラミッド型の人間関係の中で助け合っていることを勉強できる。

休憩中の過ごし方 近年は子どもの多くが町外出身で、稽古で初めて会うため、振付が休憩中に一緒に遊ばせて結束を高めようとする。当初は鬼ごっこをしていたが、徐々に小道具を使ったり、芝居の真似事をして遊ぶようになる。調査年度は子どもの多くが低、中学年と年少であったため、じゃれたり騒いだりして賑やかだったが、前回は高学年が多かったため、トランプやゲームをして過ごしていた。

詰番が用意した飲み物や、差し入れのお菓子を食べることもある。振付は当初子どもたちと遊んでいたが、子ども同士が仲良くなると、一緒に遊ぶことはやめ、タバコやコーヒーで一服しつつ若い衆と雑談をする。また、若い衆に対し運営の仕方について注意をすることもある。三味線と太夫が来てからは休憩中に削る箇所や、曲調についてなどの打合せをする。

太夫の卵を飲む習慣 戦後の物のない時代、太夫は長浜で卵をいっぱい飲んで栄養をつけて帰っていった。竹本朋太夫氏が初めて壽山に太夫で行ったとき、卵幾つほしいですかと聞かれたが、朋太夫氏は卵を飲む習慣がなかったため意味がわからなかった。タバコのことがあって、タバコが欲しいと答えたら、壽山の方は驚き三、四〇箱買ってきた。卵を飲んでも喉の通りがよくなることはない。

昭和五、六〇年代の稽古 稽古中は楽しいことばかりではない。昔は今よりもっとスパルタで怖かった。若い衆が怖かった。若い衆に叩かれたりして、泣いて帰ったこともある。今はちゃんとやれよと口でいっても、手は出せない。

ニドアガリ 役者として二回目に出ることをニドアガリという。小さいときはいわれたことをしているだけでよいが、二度目のときは話の内容はよくわかるし、プレッシャーがあるので、そっちの方が嫌だった。二度目は主役級の役がまわってくるので、観客が見ているかよりも、自分がちゃんとできるかどうかというプレッシャーがかかる。

水口氏の稽古の変化 若い頃はよく怒ると有名だった。バケツを持って立たせて発声練習をさせたり、怒って帰らせたりした。昔は小さい子にも怒っていたが、段々やさしくなった。子どもが小さ過ぎると怒っても逆効果になったりする。

振付同士の見学 振付同士が互いの稽古を見るところは原則的にしない。以前、一時期お互いに稽古の様子を見学することがあった。**床本** 新作の場合、太夫は自分で床本を書く。太夫も稽古中に床本の清書をする。現在、床本を専門に書く人はいない。太夫は養成所で、

狂言文字の稽古の時間があつた。あとは師匠の本を見て、崩し方を勉強する。役者の台詞も中に書き込んでいる。

狂言の評価の変化 振付によると、最近はインターネットで祭りを見た人からの感想や芝居に対する評価が出るため、振付けなどが萎縮してしまうこともある。

アシスタント 複雑な踊りの振りを指導するときは、水口氏がアシスタントを一人呼び寄せる。アシスタントは、春乃桜香氏で踊りの家元である。平成二三年は二回アシスタントを呼び踊りを指導してもらった。アシスタントは、三年前の出番山の時も呼んだ。

役者親 役者親が若い衆の場合は詰番をする。稽古中心配そうな面持ちで様子を見るが、とくに自分の子に話しかけることはなく、詰番の仕事をやる。しかし、子どもの振りに合わせて一緒に小さく振りをすることもあつた。家に帰ってから一緒にヨミナライをする親もいる。家から送るのは役者親がするが、若い衆でない役者親は稽古場に入らず、入り口で差し入れを詰番に渡したりして帰る。



歩き方の指導（平成23年3月25日15:08撮影）



ヨミナライ（平成23年3月29日13:47撮影）



抜き稽古 ほかの子は見ながら踊りの確認（平成23年4月7日10:41撮影）



殺陣の指導（平成23年3月29日10:12撮影）



休憩中（平成23年4月2日15:37撮影）



黙想（平成23年4月2日17:08撮影）



音源の操作、小道具の作製、日誌に書き込む詰番（平成23年3月29日13:47撮影）



太夫と三味線を交えた稽古（平成23年4月9日15:03撮影）

第八項 役者親

役者親は裸参りの際に家で若い衆を接待する。かつてはそれぞれの家で毎晩酒と食事を提供していたが、時間的、経済的負担により、合間で接待するようになっていく。ほかにも役者係や三役への祝儀をし、接待をおこなう。多くの山組で三役が揃う四月上旬に役者親が三役を接待する。

また、子どもの健康管理などに気を使うため、精神的なプレッシャーを感じる役者親が多い。

役者親は振付への配慮などから、線香番まで稽古場に出入りできないとする山組が多い。萬歳樓では役者依頼のキメザケ後は家でも子どもとあまり話をしない。

【春日山（本町組）】

役者親 役者親の若い衆への接待は春日山ではしていない。ただ振付に対しては役者親から祝儀をしている。役者親になった場合、たとえ若い衆や筆頭であっても、線香番まで稽古を見ることはできない。これは公平な立場を守るためである。

【月宮殿（田町組）】

役者親による役者方の接待 各役者方につき役者親が二人ずつで接待をしていたが、平成一年から役者方だけでなく、若い衆全体に対して役者親が接待するようになった。

平成二三年の接待は三月一二日一八時からおこなわれた。

役者親の費用負担 長濱八幡宮でのお祓い、三役・着付・山組への

ご祝儀、花束、ビデオ撮影費用などを負担する。

裸参りでの振舞 裸参りのときの振舞は各役者の家でおこなった。何軒で負担しても役者親全体の費用は同じ額のため、軒数が少なくなるほど一軒当たりで負担するお金が増える。裸参り初日の接待は来る人が多い。鯛酒は必ず出す。

一方田町会館では、月宮殿を構成している四か町の自治会が一日ずつ交替で、裸参り後にうどんの賄いを出す。これは山組の予算から出る。かつて接待の給仕は男性のみだったが、現在では女性もおこなっている。

狂言を通じた家族ぐるみの関係性、若い衆との関係性 子ども同士はすぐ仲良くなるので、そこで子ども同士、またその両親を含めて家族ぐるみのつながりができる。また若い衆が世話をするなかでのつながりができる。

【諫鼓山（御堂前組）】

役者の家での対応 子どもを役者に出しているときは、三月になると家の中がピリピリしている。風邪を引かせないように家の中を蒸気でいっぱいにした家もあった。風邪を引かせたら早く引かせないと、というくらいに考えていた。

【翁山（伊部町組）】

役者のお祝い 以前は役者になると親戚からお祝いをもらった。お祝いはお金やお菓子である。もらったお祝いは山組に持っていく。競争みたいなのだった。

役者親からの心付けとお返し 役者親から、役者係に心付けや記念

品を渡した。そのお返しもする。

裸参りの振舞 裸参りの際の役者親の家での振舞は義務ではない。

近郊からのうわさ 戦前から、近郊の農村から、長浜で役者をやったら金がかかるとうわさされた。

役者に出す意識 戦前は、役者にしたがる親が多かった。曳山の芸に出ることは名誉なことと思っていた。昭和一〇年頃は、役者をすると同級生の間でハバが利いた。戦後になると、子どもを役者に出すことは名誉とは思わなくなっていたが、一回は出したいと思っていた。

昭和四〇年代までの裸参りの役者家の振舞 昭和四〇年代まで裸参りのときは役者の家で四日間、万歳三唱して酒や食べ物振舞った。隣近所に手伝ってもらった。見栄があるため料理や酒の豪華さの競争になった。上の握り寿司、焼き肉など。うどんは伸びないよう、若い衆が帰ってくるのを見計らってうどん屋に頼む。役者の家の前でもてなす。

役者親の負担 昭和五〇年代までは丹前など着るものを役者の家で負担した。

昭和五〇年前後の三役への心づけ 役者親から三役へ心づけをした。筆頭をしていた人は、三役をよく知っていたし、余計に出していた。

役者親の了承 昔は子どもを役者に出すのは大変だったので、なかなか了承を得られなかった。

昭和五〇年前後の役者親の負担軽減改革 改革をして役者親の負担を減らしていった。昭和五〇年前後から役者親が集まって裸参りで振舞う酒や料理を共同で準備するようになった。振舞は四日間であ

る。

役者親の心配ごと 今の子どもは弱いので、健康が心配である。自分の子どもが体調を崩して芝居ができなくなったらと思ったら責任を感じる。

【常磐山（呉服町組）】

役者親の役割 男親が運営に協力する。夕渡りの際に招きを持って渡る。また、狂言のときは、大向こうで「〇〇屋」と声を出したり、着物で移動が難しい子どもを運んだりする。役者の世話は若い衆だけでは足りず、役者親も手伝う。

【萬歳樓（瀬田町組）】

役者親 役者親は線香番まで稽古場に入れない。子どもとの接触はタブーである。キメザケの口上で自分の子どもから八幡さんの子どもになるから関知しないでくれという旨をいわれる。親戚も稽古場に入れない。だから家でも子どもとあまり話さない。

裸参りの役者家の賄い 昔は裸参り四日間すべて賄いを出していた。今は役者親合同でやっている。駐車場を二か所借りて照明・テント・暖房を役者の家で用意して、奥さん連中にご飯を用意してもらう。金銭面を考慮して、役者を出さない家もある。昔は子どもを役者に出すと三〇〇万円かかったといわれる。競争して曳山に飾り金具をつけたりした。

第九項 演出

狂言用にもとの台本を大幅に変更しなければならない。まず、役者の人数が五、六人であるため腰元や武士の数を大幅に削る。また、時間も四〇分と制限があるため台詞を削除している。

小道具などを置かず、曳山の舞台をきれいに見せる芸をヤマの芸といい、山組の人はそのような演出を望んでいる。大歌舞伎の振付は、長浜で受ける芸を意識して演出している。

山組から演出へ要望をすることもある。たとえば、出番の量を増やすようお願いしたり、三方向から見られる曳山の特性を活かした演出をお願いしたりする。

【月宮殿（田町組）】

長浜用のアレンジ 二三年の外題である「姫山姥」のもとの話には、姫に仕える腰元がたくさん出演するが、曳山祭の狂言は役者が少なくて一人だけにした。また最後に討ち入る武士も一〇人くらいいて、その立ち合いも見所だが、太田十郎と月宮太郎の二人だけに減らしている。もとの話から、長浜用に台詞や演出をカットしている。

【諫鼓山（御堂前組）】

長浜の作品作りで気をつけること 「お邪魔虫」とか、今風の台詞を入れて、演じている子どもたちが楽しめて、見る方も楽しめるものにした。長浜は可愛らしく楽しいものが受ける。

制限時間について 四〇分の制約内でやるのは難しい。振付が長浜で振付をし始めた頃は一時間くらいあった。しかし山曳きを早く返さ

なければいけない、観光客を長い時間立たせないようにという配慮で時間が短縮されてきた。

地芝居の芸の仕方 三役は地芝居の人が面白い。芸のシクチ（仕方）が違う。これでもかこれでもかとアピールする。大狂言でこれでもかとするクサイ芸だといわれた。でも、長浜ではクサイ芸が受ける。振付の水口氏は松竹で振付をしているので、クサイ芸をしようと思ってもできない。クサイ芸は体に染みついていないとできない。クサイ芸はそれだけ芸がないとできない。水口氏はクサイ芸をすることに照れがあるかもしれないと自己分析をする。

ヤマの芸 山組の人によると、曳山がよく見ることが重要とのことである。小道具などは置かず、きれいな曳山を見てもらうのがヤマの芸である。

振付によると、ヤマの芸とは子どもらしい芸のこと。観客はお金を払って見ている訳ではない。屋外で立つて見ているため、振付は観客をどう引きつけるかを考えている。それには多少クサイの必要。テンポよくできていること、四〇分という時間内で話がわかりやすくまとまっていることが大切である。

観客に受ける芝居 目新しいもののほうが客受けがよい。一から作ったものは受けるかどうかわからない。

平成二三年の外題 今回は着替えが多い。基本的に衣装や髪をかけることはない。衣装や髪を何度もかえるのは初めての試みである。今回主人公の二人は、二〇代から老人まで三回着替えることになるため、例年よりも大変である。このような試みは初めてのため、観客に楽しんでもらえると思う。ストーリーもわかりやすい。

平成三年の趣向 振付によると、平成三年の外題のコンセプトはテンポをよく、そしてわかりやすくである。

また、演出家として趣向をこらした。今回は三幕あるので、第一幕は雪、二〇年後の第二幕は月、さらに二五年後の第三幕は花と、隠し味で雪月花を劇中に入れている。

【翁山（伊部町組）】

ヤマの芸 山組の人によると、曳山に合った芸がよいという。本物の舞台に似せようとしているのか、最近は幕や小物が多くなっているが、綺麗な曳山を見てもらいたいのであまり要らないと考えている。

若い衆の振付への要望 昭和五、六〇年代は振付に注文もした。「こっちにも顔を見せてほしい。」「こっちにも見得を切ってくれ。」振付の機嫌がいいときに筆頭が「どうやる先生……」という感じでお願した。曳山祭の狂言は、普通の舞台と違って曳山の周囲にも人がいる。親戚も多く来る。もっと出番を増やしてほしい、役者みんなにいい出番を作ってほしいと思う。しつこく泣くとよく拍手が来るので、役者に三秒から五秒長く泣くよう頼むこともあった。

第一〇項 三役修業塾

昭和期は地方芝居や松竹から三役を呼んでいたが、その人たちが高齢になり呼べなくなってきたことから、長浜で太夫と三味線を育てるようになった。平成二年に開講し、現在では、長浜曳山祭だけでなく、長濱ゆう歌舞伎や、米原・垂井・桑名などの子ども歌舞伎からも招へ

いされ活躍の場を広げている。現在塾生は一六人で、週一回長浜市曳山博物館で練習している。

事務所 長浜市曳山博物館。

修業塾の位置づけ 財団法人長浜曳山文化協会の一組織。

修業塾の練習場所 当初は田町会館、のちに六荘公民館、現在は長浜市曳山博物館。

修業塾の財源 ふるさと創成資金の五〇〇〇万円を基金に、その利息を運営資金にした。当時は利息が六%だったから、それだけで年間三〇〇万円くらいの資金があった。さらに県と市からも助成された。ふるさと創成資金の五〇〇〇万円はのちに財団法人長浜曳山文化協会設立時の基本財産となった。現在は市の助成でおこなっている。

修業塾の人数 設立当初は各山組から最低でも数人ずつ、三役の候補者を出すことになり四五人いた。その半年後には既に一五、六人に減っていた。その頃は三味線が二、三人で残りは太夫だった。当初女性はいなかったが、途中から三味線が入ってきた。現在塾生は一六人で、高校一年生から七〇代までの人が習っている。

指導者 名古屋の三味線のプロである豊澤千賀龍氏が設立当初から平成一六年まで指導していたが、体調不良のため平成一六年から平成一八年は豊澤時若氏が指導し、再び豊澤千賀龍氏が平成一九年から現在まで指導している。また、平成二二年からは塾生の三味線・豊澤賀祝氏が指導役も兼ねている。

練習方法 設立当初の練習方法は、師匠が語り、またテープなどでも覚えつつ、全員で浄瑠璃を語るといったものだった。その後、三役

修業塾の元世話役の〇氏が申し出て、一対一での教授方式にかわった。全員を集め、同じ外題で一人当たり二〇〜三〇分くらい練習したあと、全体を軽くとおすという方法である。

豊澤千賀龍氏による指導は当初週一回だったが、指導者の体調の問題があり月に一度になった。

修業塾塾生の出演の場 〇氏が世話役を務めていたときに発表会を始めたが、〇氏が世話役を辞めてからはなくなった。ただ、平成二〇年に発表会が再開した。長濱ゆう歌舞伎ができて覚えるのが早くなった。最近は三役修業塾生が米原・垂井・播州・桑名・揖斐川・各務原などで太夫と三味線を務めている。垂井へは太夫・三味線が二組、桑名には一組行っている。村国座へは五年続けて行っている。

修業塾からプロへ 修業塾から豊澤長一郎氏と豊澤勝二郎氏の二人が国立劇場の養成所を経て松竹の三味線弾きとしてプロになった。